
Two Strange InterestS

霧原菜穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Two Strange Interests

【Nコード】

N9181A

【作者名】

霧原菜穂

【あらすじ】

ギャルゲーを愛する彼女とBLに逃避する彼が出会ったとき、現代日本でしかありえない、世にも不可思議な利害関係が構築される。この2人の関係がどこまで進むのか：色んな意味で後退するかもしれないが、見守っていただけると嬉しいです。小説自体はX指定ではありませんが：多少、「そっちの世界（萌えという言葉が蔓延っている世界）」に関する知識があるほうが、色々面白いと思いますよ？

2人の奇妙な利害関係（前書き）

このページにある物語は、「かなり」偏っています。同人要素やエロゲ、BLという言葉に嫌悪感を抱く方は回れ右で引き返すことを推奨します。

内容に直接、性的な表現はないような気がしますが、間接的にはそういった表現が文中に度々登場する、

かもしれません。

あなたが無理して気分が悪くなったとしても、霧原菜穂は損害責任を負う気はありません。

そして、私は別に欲求不満じゃありません。無駄に深読みしないでください、妄想を膨らませて勘違いしないでください。

加えて、

1人で夜の時間を愉しめるような内容ではありません。

フィクションとノンフィクションを一緒にしない方のみ、本文をお楽しみくださいませ。

2人の奇妙な利害関係

『わ、私……先輩のことが、好きですっ!!』

彼女は少し上ずりながらも、自分の思いを目の前の相手にぶつけた。

人気のない放課後の教室。しんと静まり返り、西日が差しこむ絶好のシチュエーションの中、主役の二人の吐息だけが響く。

ポニーテールが似合う、一つ下の少しおっちょこちょいな後輩。

何に対しても一生懸命で、先日の試合では努力でレギュラーを勝ち取った。その時の特訓に付き合わされたのも、今となってはいい思い出だ。

『真鈴さんのことは分かってます。でも、私だって……負けないくらい好きなんです!』

彼女が自分を慕っていることは知っていた。だけど、あえて気付かないふりをしたんだ。

——俺の中には、別の女性の姿もある。俺は二人を天秤にかけたんだ。

彼女は俺のそんな気持ちを理解してくれて、あいつより先に、こうやって告白してくれたんだ。

優しすぎる、そして……彼女にそこまでさせてしまった自分が情けない。

夕日よりも顔を真っ赤にして真っすぐこちらを見据える彼女の瞳は、潤んでいるようにも見えた。

『お願いします……答えを、聞かせてください……!』

答え、ここではぐらかすのは彼女に対する冒瀆だ。

だから、俺ははっきり伝えなければならぬ。

彼女に、自分の出した答えを。

それは——

「……うう、ごめんね花梨ちゃん。今回は君ルートじゃないんだよ
おおー！」

私は断腸の思いでクリックする。

『ごめん、君の気持は嬉しいけど、俺はやっぱあいつが好きだから』という選択肢を。

その後、1時間かけて幼馴染の真鈴ちゃんルートへ突入した（途中のミニゲームで手こずった……）私は、再度、画面に出てきた選択肢で悩んでいた。

「ねえ……どうする？」

画面の向こうにいる彼女が、色っぽい目線で問いかける。

男の1人暮らしにホイホイあがりこんできた彼女は、間違いなく今夜のメインディッシュ。

それは分かっているけれど……無意識のうちに、パイプ椅子の上で胡坐をかいていた。目の前にある選択肢は二つ。

服を上から脱がせるのか、それとも下から脱がせるのか。

直前でセーブして、後から差分を回収する。要するに、結果的には両方の選択肢を選ぶことになるのだ。

だけど、悩んでしまうんだなあ、これが。

どちらを先にするべきか……。イヤホンのコードを人差し指でいじりながら、考える。

上か、下か……。これは重要なファクターだ。

真鈴ちゃんはスタイル抜群の世話焼き幼馴染だ。上を先にすればたっぷりご奉仕、下を先にすればこっちがご奉仕、という展開が待っているはずだ、そうに決まっている、それじゃなければ許さない。普段の私ならばまず先に上を脱がせるクリックなのだけど……なぜだろう、今日は何となく決めかねる。

悩むこと約3分。舌なめずりをしながらも決められえず……折角

なので、同じ空間で本を読んでいる、この部屋の主でもある「彼」の意見を聞いてみることにした。

耳につけていたイヤホンを右側だけ外すと、くるりと体を椅子ごと反転させて、

「ねえ新谷氏、上を先に脱がせるのと下を先に脱がせるの、どっちがいいと思う？」

「いきなり真顔で聞くな。それに……どうせ差分を回収するならどっちでもいいだろう？」

この部屋の主人が読んでいた本から顔を上げ、パソコン用の椅子に座っている私に冷めた声で的確に突っ込んだ。

あまりにも的確だったので、悔しくなった私は……彼をジト目で見降ろす。

椅子に座っている分、私の方が位置的な上から目線になる。お互い視力は底辺ギリギリなので眼鏡着用。ノンフレーム眼鏡の彼と、視線が一瞬交錯して、

「あれ、新谷氏……本は？　読み終わったの？」

「終わってないよ。沢城の唸り声が気になるから」

ため息をつかれた。眼鏡の奥にある瞳が、完全に呆れている。

彼は腕を組み直し、あたしに向かってもっともな一言。

「どっちでも結論は同じだろ？」

「同じけど違うの！　上を先にすればおっぱい天国だし、下を先にすれば――」

「ああもういい。頼むからこれ以上言うな。聞いている僕が恥ずかしいから」

赤面しつつ、ひらひらと右手を振った。その視線は最早こっちを見てもいない。

「冷たいなあ、新谷氏は」

「俺が冷たいんじゃないって、沢城が無神経だと思う……はいはい終

わり終わり、己の欲望のままに好きな方を選んでくれたまえ」

首までふって話を終わらせようとする彼に、私も我に返って苦笑いを向けた。そんな、いつもの光景。

私がパソコン上で進めていたのは、18歳未満お断り要素満載のゲーム。言葉を選ばずに率直に言うならエロゲ。

ちなみに、先ほどまでプレイしていたのは、オーソドックスな学園恋愛コメディ。だけど、SF、RPG、陵辱、ジャンルは問わない。面白そうなら、私の波長に合うなら何でも来いという雑食なのだ。

ただ、私の波長に合わない場合は、プレイ中にそういうシーンをすっ飛ばす、という暴挙に出ることもある。純粹にグラフィックの美しさやシナリオの面白さで楽しみたい場合は、こういうゲーム最大の売りである濡れ場を豪快にすっ飛ばしたって構いませんとも。第一、女の子の喘ぎ声を聞いて興奮するほど飢えてないし。

女の私視点だから余計に思うんだけど、こういうゲームのヒロイン、人間的に素晴らしい場合もあったりして。

料理得意、世話焼き、成績優秀、ナイススタイル。ファッションが可愛ければ参考にしたい、仕草が可愛ければ見習いたい。ただしもっばら思うだけ。実行できればゲームを見てポツキーをくわえたりしないのである。

主人公を操作しているリアルな私は、そんな彼女たちと間逆の位置にいるのだろう。伸ばしたことなどない、かろうじて肩付近までのびたゆるるストレートの髪に、さり気なく淵のある眼鏡。特にコレといって特徴のない風貌に、動きやすい格好が好きなので、基本的にTシャツとジーンズ着用。

そう、こんな私だから……長い髪の毛を可愛くアレンジして（現実的に不可能な髪型の女の子もいるけどね）、普通にスカートをはいている彼女たちを妙に尊敬してしまうのです。

冬なのに、とか、思いながらだけど。

言い足りない私の雰囲気を感じているのだろう。彼は強引に話を

まとめた。

「まあ、頑張ってフルコンプ目指してくれ」

「言われなくても」

そんなこと、言われなくても分かってる。

私がポッキーをもう一本口にいれると、彼は読書再開。本屋のカバーがかかった文庫本に挟んだしおりを引っ張ると、開いたそのページから読み始める。

面白いからって大声で笑ったりしないし、そんなシーンだからって1人で興奮したりもしない。基本的にいい人面のポーカーフェイス。

彼は外見も整っているので、文庫本がオプションとして似合うのだ。知的っぽいというか、インテリっぽいというか。勝手なイメージだけど。

本当に、動揺のカケラもない、ごく普通の表情だから……彼が読んでいるは一般文芸の文庫本なのかって思ってしまうんだけど。

違うんだな、コレが。

彼が読んでいるのは耽美小説。最近の言葉を借りるならBL——ボーイズラブ、美少年と美少年が繰り広げる今のところ法的には色々禁断の世界を、そりゃーもう濃厚に、かつ、理想的に描いている小説なのだ。

挿絵も少女漫画並のキラキラ具合で、拍子はホログラム使用。一目で分かる受けキャラは正直、女性かと思うくらい可愛いことも多々。

現時点で私は専門外、というか受け付けられないジャンルなのだけど……最近はまだ、そんなことも言っていられないような気がしてきくとそれは、この彼にも言えることだ。

それに、さっき散々、画面の向こうのヒロインに突っ込みをいれたけど、よく考えると自分も似たような状況なんじゃないかって、

ふと、思うこともある。

先ほどこちよつと述べたように、この部屋の主人は私じゃない。今、胡坐をかいて小説の世界に没頭している彼なのだ。

要するに、「男の1人暮らしにホイホイあがりこんで」っていうのは私にも言えること。自分の無防備さに多少なりとも危機感を抱いてはいるんだよ、多分。

ただ。

私にそういう計算があるとか、彼にそういう下心があるとか……そういうことでは、なくて。

私たちの関係は、一種の利害関係。きっと世間的には誰からも認められないであろう、そして、可能ならば誰にも知られたくない、そんな関係。

私は彼が読みたいBL小説を私の友達から借り、

彼は私がやりたいエロゲを同じく彼の友達から借りて、交換する。加えて学生寮生活の私は、一人暮らしである彼の部屋にあるパソコンにゲームをインストールして遊ばせてもらっている。ゲーム終了後は勿論アンインストールして、また……新たなソフトとBL本を交換する。

そういう関係だ。

2人の奇妙な利害関係（後書き）

最初に公開していたのがあまりにもR-18だったので差し替えました……気になる方はホームページ版をご覧ください。

彼と彼女の絶妙な出会い

私と彼の出会いはあまりにも特殊であり、それ故非常に勝手ながら「縁」を感じてしまうのだが……詳細を語り始めると自分が虚しくなるし、一部からはネタにしきれないので、あまり人前で口に出そうとは思わないし、脚色をするしかないのが現状。

ただ、ある程度は暴露しておかないと物語が進まない……今回は恥を忍んで、花の女子大生であることを忘れて腐女子になろうと思う。

ただし、私の場合は、ベクトルの向きが少し違う「腐女子」だと思っているのだが。

彼——新谷薫との出会いは、もう2ヶ月ほど前だろうか。大学に入学した直後、とあるサークルの入会お試しコンパにて、たまたま隣に座って話したのがキツカケだった。

新入生だけで20名参加、あくまでも入会を強制しない「お試しコンパ」なので、友達作りを目的に参加している人も多い。かくいう私もその一人だったのだが……お互い新入生であること、私も人と話すのは嫌いじゃないこと、彼は外見と人当たりに関して、少なくともその場の誰が見てもパーフェクトであることなどの要素もあり、当時は互いの趣味嗜好など知る由もないから、当たり障りのない一般的な話題で近くの席にいた数人と一緒にワイワイガヤガヤと……「大学生っぽく」盛り上がったのだ。それに、女性陣から一番熱い眼差しを向けられていたのも彼だったし……私も正直、いい人だなあ、と、珍しい感情を抱いたことは事実。だから余計、印象に残っていたのかもしれない。

ただ、学部が違えばサークル活動でもしない限り接点はない。私の場合、結局サークルには所属せず、バイト学生の道を選んだ。理

由は勿論、自由に使えるお金を稼ぎたいからである。年齢的にも無事解禁になったことだし……何に使うかは乙女の秘密ってことで。

そんな大学生活を送りながら、2度目の遭遇はこれまた偶然、ある授業だった。全学部の1年生がカリキュラムの都合さえつけばまんべんなく受講しているであろう一般教養。

定員100名弱、学内では中型の講義室。長方形の室内は階段状で後方からもホワイトボードが見えるようになっていて、机が横3列、縦9列に並んでいる。机一つにつき横並び3人掛けなので、親しい友人と一緒に受講しない場合は、大抵が真ん中の席をはさんで両端に座るのがほとんどなのだが、私もその例にもれず、丁度窓側、教室後方の空いていた机に鞆をおいて——気付いた。

席から椅子を一つはさんだ向こう側に、眼鏡をかけて文庫本を読んでいた彼がいたのだ。

前と同じノンフレームの眼鏡に黒いブラウス、下の方までは見えなけれど……服装はかっちりしていてクールな印象だが、話しかけてからの雰囲気は相変わらず柔らかい。

私が偶然その場に座ったその瞬間、周囲から何となく視線を感じるけど、まあ、どうせこれも単なる偶然。次回からはまたそれぞれ何となく座るだろうし。

彼がちらりと視線を上げて、私の存在に気がつく。間違いない、あの時の彼だ。

「あ、えっと、この間は……」

思わず呟いた私に、彼が「この間はお疲れ様」と爽やかに返してくれたのだ。たったあれだけの縁だったにも関わらず、（恐らく）忘れられていなかったことに驚いてしまう。

「文庫、何読んでるの？」

「え？ あー……図書館で借りたんだよ。暇つぶしに丁度いいかなって」

私が興味本位で覗き込んだ本をバタバタと片付けて、「そういえば」と場を仕切りなおす。

「沢城さん、法学部だっけ」

「へ？ あ、うん、そうだけど……」

唐突に名前を呼ばれたことに驚いてしまった。困った、確かにそういう場だったから学部と名前は互いに名乗ったけれど……こっちはそんな彼の情報を脳内から検索出来ないまま話しかけてしまったのに。

ああもう！ 原画家さんの名前なら忘れないのに！ 思い出すんだ沢城都、間違いなく名前も聞いたし印象に残ったはずだ、珍しく年相応にはしゃいだあの日のことを思い出すんだ！

そして、

「し……新谷君は文学部だっけ？ そうだ、結局どこかのサークルには入ったの？」

「いいや。バイト始めたらそっちの方が面白くなっちゃってさ」

よし間違っていない！ よくやった私の記憶力！

何とか愛想笑いも形になった（はず）。もしかしたら少し引きつっていたかもしれないが。

そんな私の心中を察して……いられたら少し困るけど、至近距離で改めて見る新谷君は、どこぞのメジャーな雑誌で読者モデルでもやってるんじゃないかと思うほど、整っていた。色々と。

多分、私が普通の女子大生の感性のみで構成されていたのだとすれば、このまま彼とお近づきになるために話を盛り上げようと努力した、かもしれない。

ただ、今の私を構成するのは……残念ながら、三次元よりも二次元だったのだ。

「新谷君もバイトしてるんだ。どこで？」

「大学近くのファミレス、分かる？」

「ああうん知ってる。バイトの制服がP i aキャロみたいところでしょ？」

「ぴあ……？」

はっ！？ ついうつかり本音が出てしまった！？

ちなみに「P i aキャロ」とは、制服の可愛いファミリーレストランを舞台にこれまた可愛い女の子達と親交を深めていく男性向けのゲーム。最近その女の子の数が多くてCGとフラグの回収が大変なんだけど……それはさておき。

怪訝そうな表情でコチラを見つめる彼に、

「あ、えっと……私の実家の近くに、そういう名前で制服の可愛いファミレスがあったの」

もしかしたらチェーン店かもねー……などとゲームの話を参考に何とか乗り切った、つもり。彼もそれ以上突っ込まなかったからいいことにしよう！

と、講義開始を告げるチャイムが響く。時間ぴったりに入ってきた教授を合図に、私たちはそれぞれ体を前方に向けたのだった。

そして。

「……新谷、君？」

講義終了から1時間後。条件反射で名前を呼んでしまった瞬間に激しく後悔する。だが遅い。

それが、3度目の逢瀬。ライトノベル……の、隣、耽美小説の棚を見つめながら躊躇っている彼と、男性向けゲームや関連雑誌を両手に抱えた私が鉢合わせしたのだった。

その店は、大学からバスや私鉄を使って数十分、駅や商業施設が密集したターミナルビルの中にある。

コミックやCDの品揃えは勿論、購買物によってはオリジナルの特典がもらえたり、透明のブックカバーがついてきたり、ポイントに応じたサービスもあるので……ついついここまで足を運んでしまふのだ。だから今日も、本当は大学近くの書店でも買えたのに、ついつい。欲しい雑誌を買うとポストカードがセットでもらえるって

ことだったから、つつい。

それに……普通の書店で買うよりも、ここの方がレジに持っていくやすいし。

そう、多分それは、彼にとっても同じだったのだろう。

だからこそ、私たちはこの店内で再会してしまったのだ。

ただ、その時の気まずさといったら、言葉で表現するのが難しい。私的には、日本の総理大臣と中国の国家主席が靖国神社で鉢合わせするくらいの気まずさだと勝手に思っているけど。

……とにかく、鉢合わせしたものはしょうがない。彼がなぜこの棚の前で立ち尽くしていたのかは分からないが、私だって両手に持っている本は、表紙が水着美少女・裏表紙が明らかなエロゲの広告——隠しようがないほど男性向けだ。それらをさりげなく自分の背中で隠しつつ、

「……お節介かもしれないけど……何か欲しい本、あるの？」
「え？」

それはあくまでも、私が持っている本へ彼の注意を向けないために発した言葉であり、

「いや、さっきから躊躇してるみたいに見えたから。確かにそういう本、男なら買いくいだろうし……あ、興味があるんだったら代わりに買ってこようか？」

彼が見つめていたのは明らかに女性向けな書籍ばかりが並んでいる。今、男性向けの雑誌を持っている私だからこそ、その心境は分かる！ お願いだから分かった気にさせて！ そして私をレジへ行かせて！

「でも、沢城さん……」

「私、カウンターに取り置きもしてもらってるし。それに、今ならレジも女の人だから……さすがに男の人がレジだったら躊躇するけど、比較的この店って可愛い女の子がレジなのよね。だから、新谷君はもっと買いづらいんじゃないかな、って」

私はもう、この店の中でなら、何も気にしないから。

「いらぬなら私のお節介れだけど、何か欲しくて棚を眺めてたんじやないかなーって、思ったから。この時点で私たちってば立派な同類なんだからさ、遠慮なんかしなくてもいいよ」

私の言葉に、彼は「それは、確かに……」と、苦笑いで納得し、

「じゃあ、悪いけど頼んでいいか？ あ、勿論後からちゃんと……」

「分かってるって。ほい、どれですかー？」

商談成立。とりあえず手近にあった店内用のカゴに自分の欲しい商品をそそくさと突っ込んだ私は、彼が手に取った本数冊の表紙を見つめ――

表紙から漂うあまりにも美しい世界に、絶句したのである。

彼と彼女の絶妙な出会い（後書き）

こんな出会いをした方がいらっしやれば、是非是非教えてください。
ちなみに、私もエロゲ雑誌買うのに（場所を選べれば）躊躇しない
ぜ！（威張るな）

(いいだけの)彼の独白

彼女が会計を済ませた後、俺達は近くのファーストフード店へ向かった。

平日の昼間は仕事中のサラリーマンや俺たちのような空き時間の学生でそれなりに賑わっている。それぞれ適当に注文を済ませて、店の2階、奥まった席で改めて向かい合い、

「はい、これが新谷君の本」

彼女が手渡すのは、別包装された文庫本2冊。青いビニール袋に包まれたそれと引き換えに、その価格を計算してお金を渡す。

「でも、意外だったな……新谷君、そういうの好きなんだ」

ポテトをつまみながら俺をまじまじと見つめる沢城さんに、苦笑いを向けるしかない。

急に襲いかかる不安。今の俺は、彼女にどう思われているのだろうか。

変な奴、男のくせに——内心、軽蔑されているのだろうか。

「あ、ゴメンね。別に新谷君が何を好きでも大いに結構だし、むしろ嬉しかったんだよ」

そんな俺の心中を察したのか、彼女は慌てて言葉を続ける。

そして、自身が持っている袋の中身をちらりとのぞかせ、

「私も、ね……BLよりもギャルゲーが好きで、本当はもっと色々見て回りたいんだけど、やっぱり周囲の目が気になっちゃうっていうか……あんまり大声で好きだって言えないし、話が通じる友達もいないから、新谷君に妙な親近感が……勝手に、だけど」

「お互い、肩身が狭いな」

ワンコインで飲めるコーヒーを口に含みつつ、俺も彼女に妙な親近感を感じていた。

「でも、沢城さんは強いよ。今日だってカウンターに取り置きしてもらってたんだろ？」

「……店頭特典目当てでね。久しぶりにオフィシャル通販以外でゲーム買ったのよ……ふっ、見事に釣られちゃったわ」

あさっての方向を見つめながら呟く沢城さんだったが、その視線が急に俺の方に向けられ、

「そういう新谷君だって、今日の本は店頭特典のペーパーが欲しかったんでしょ？ ふっ、同類よ」

「おっしやる通りでございます……」

にたりと口元に笑みを浮かべる沢城さんにつられて、俺も笑っていた。

こうやって、自分と趣味が近い人と話すのは……久しぶりだったから。

それから互いに分かるアニメやゲームの話で同意したり衝突したりしつつ、気がつけばそろそろ大学に戻る時間。俺は講義だけど、沢城さんは帰宅後、買った雑誌を読みふけるそうである。

「あれ？ 帰ったらゲーム三昧じゃないの？」

俺の素朴な疑問に、彼女は「それがね……」と、急に落胆してため息をついた。

「私、ノートパソコンでゲームやってるんだけど、今、そのパソコンを寮の友達に貸しちゃってるの。戻ってくるのは早くて3日後……それまでは特典CDや画集でも見ながら妄想するしかないのよ……」

がくりと肩を落とした彼女は、「おかげでネットも出来ないし……やっぱり、安いデスクトップを買うために貯金しようかなあ……」と、ぶつぶつ呟きながら最後のポテトをつまんだ。

ただ、いくら友達とはいえ、ギャルゲーがインストールされているパソコンを貸してしまう彼女を凄いと思ってしまふのは俺だけだろうか？

「パソコンを貸してる？」

「うん……ほら、入学の時にパソコンを買えって言われなかった？」
パソコンは現代の大学生における必須アイテムになっていた。レ

ポートも手書きを認めない教授がいるし、課題をメールで提出するよう指示されることもある。学内にパソコン室は3か所あるけれども、学期末は課題に追われた学生でこった返すことになるのか。

それに今後を考えた場合、パソコンは学生のうちに使えるようになった方がいい……そんな話を延々と聞かされ、最終的にとあるメーカーが大々的に自社のノートパソコンをPRしていたオリエンテーションを思い出す。

「私はもう自分のパソコン持ってたから買わなかったんだけどね……入学時に注文したやつ、まだ届いてないって友達からの頼みだったから」

「でも、沢城さんのパソコンには、色々見られて困る物が入っているんじゃないの？」

「そ、それは言わないで……ユーザー切り替えることで見られないようにしてるけど、不安だから」

言葉の通り不安そうな顔で呟く彼女に何か触発されたのか……俺はこの後、自分でも予想外の提案をすることになる。

「沢城さん……そのゲーム、やりたい？」

「へ？ そりゃあ勿論。今日だってそのためにバイト休みにしたんだから……無理だけど」

なるほど。今回の事態は彼女にとってもイレギュラーな出来事。だったら余計に、彼女にこの提案を試みようと思えた。

俺にあの場で声をかけてくれて、久しぶりに肩の力を抜いて話せたこの時間のお礼、という意味も含めて。

「じゃあ、俺の部屋のパソコン……使う？」

「へっ？」

その言葉を聞いた瞬間、彼女の目には明らかな戸惑いと……隠しきれない期待感。

そしてそれが、奇妙な関係の始まりだった。

(ここだけの) 彼の独白 (後書き)

こんないい人が近くにいる方、是非是非教えてください。
ちなみに新谷氏、電気代は請求してません。いい人！

二人のゲーム談義？

その言葉から2か月。

あの時買ったゲームはフルコンプしたけれど、私は相変わらず、この部屋のパソコンを占領している。

「さすがに……目が疲れたー……」

椅子の上に胡坐をかいて、画面の向こうで微笑んでいる大本命だった年上の先輩^{ツンデレ}を攻略したところで、天井を見上げ、ため息。

とりあえず目が疲れた、肩が痛い、喉が渴いた、微妙に眠い、おなかすいた。人として麻痺していた部分が正常な感覚を取り戻し、私へ一気に襲い掛かってくる。

パソコンの時計を確認すると、午後9時を過ぎたあたりだった。ええっと、私が授業終わってこの家に上がりこんだのが夕方だったから……えっと……時の流れって早いなあ。

と、この部屋の住人である新谷氏が、苦笑で私に缶ジュースを差し出す。ありがたく頂戴して一口。微炭酸が口の中に広がり、とりあえず眠気が吹っ飛んだ。

ベッドの上に腰をおろして同じジュースを飲んでいる彼も、目元を抑えてあくびをかみ殺している様子。

この数時間、同じ室内にいたのだが……特に盛り上がった会話はない。私はイヤホンを使って自分の世界を楽しんでいたし、彼は彼で、シリーズものを一気に読破するために集中していたし。

趣味に没頭することを目的にした会合なので何の問題もない。ただお互い、相手に無頓着すぎるのかも。

こんな二人の数時間ぶりの会話は、相変わらず無駄に爽やかな彼の言葉から。

「お疲れさん。今回ののは大分一気に進めてるみたいだけど……そんなに面白いのか？」

「んー……まあ、内容としてはありきたりなんだけど、やっぱりツ

ンデレはブームになってるだけのことはあるわね。ベタだけどギャップに胸キュンよ。キャラ同士の会話にテンポがあって飽きないし、声優さんもメジャーな人が名前変えて出演してるから、変な違和感もないし」

「そりゃよかった。大樹にも伝えておくよ」

ちなみに大樹とは、彼の友人で……私という存在に興味を示し、ゲームを横流ししてくれる貴重な存在である。

私はまだ会ったことないんだけど（専門学生で忙しいらしいみたい）、きつと会ったら何時間でも話が出来るんじゃないかな。

私がプレイしているゲームは毎回、彼を仲介にして借りてきてもらった一品である。しかもほとんどがメーカー通販特典付の初回限定版。特典の小冊子などを読むのも楽しみの一つに増えて、嬉しい誤算だ。

「新谷氏、全部読んだの？」

私が渡した小説を、彼はテーブルの上に積み重ねている。読書中の本は枕の横に積み重ねるのが癖らしく、この位置にある小説は「違うものとかえてほしい」という彼の意志を示しているのだ。読むのが早いのはお互い様。今日は奮発して5冊（とあるシリーズ全巻・外伝は除く）を渡したんだけど……もう全部読むなんて、悔りがたし。

ちなみにこれらのBL小説は、私も自分の人脈を使って調達している本である。今日は普通の文庫本だが、新書サイズから同人誌まで幅広くレンタルOK。でも、「最近の花嫁がブームなのよ!」と、目をキラキラ輝かせながら言われても……私はどう言葉を返せばいいのやら。とりあえず驚いたけど。

椅子の上から表紙を見つめ、やっぱり理解できない世界だなあと、この扉を開くことがあっても、それはまだまだ遠い未来のことだろうと、しみじみ感じてしまうのである。

「……ねえ、新谷氏？」

私はいつの間にか、彼のことをそう呼んでいた。ちなみに彼が私

を名字で呼び捨てなのは、私がそうしてくれと言ったからである。

「BLの魅力って、何？」

「いきなりだな。それに……そういうことは、いつも沢城に本を貸してくれる人に聞いた方がいいんじゃないか？」

「いや、新谷氏がどうしてBLを読んでるのかな、って。前から素直に気になってたから」

新谷氏は、何と言うか、BLに性的興奮を求めているわけでもないだろう。その辺は私と同じで——私がギャルゲーの攻略対象ヒロインに欲情せず、突っ込みながら物語を進めるのと同じで、ある程度第三者的な立場から楽しんでいるような、そんな気が、するから。私の言葉に、彼は少し考え込んでから、

「綺麗な世界に憧れてるのかもな」

一言、端的にこう言った。

「……は？」

綺麗な、世界？

真意を理解できずに思わず聞き返した。彼はBLに何を求めているんだろう。まさか、本当に男性が好きで、でも、それを表に出せないから物語の中に自分の理想を探し求めている！？リアルではあんまりそういう世界って受け入れられない傾向が強いから！？

「し、新谷氏……そんなにスーツの上司に責められたいの！？」

「そういうシチュエーションを端から見るのは別に構わないけど、自分が当事者にはなりたくないかな……」

見るのはいいのか！？ 気持ちには分かるけど本当にいいのか！？ 思わず椅子の上からずり落ちそうになった。私の中では混乱が別の混沌を生みつつ、とりあえず、彼の続きに耳を傾けることに。

「例えば、普通のコミックだと……最初はヒロインのライバルとして出てきたキャラがヒロインを差し置いて主人公とくつついたとしても、最終的には丸く収めようとするだろ？」

「まあ、基本的には、ねえ……そういう修羅場を売りにしてるゲームも最近が多いけど」

「ただ実際、男女の関係って奇麗事ばかりじゃない。だけど、最終回の後日談に不幸な話が描かれることもないし……まあ、そんなのファンは望んでないんだろうけどさ」

確かに、本編の一ルートならまだしも……ファンディスクが「特定ルート終了後、残されたヒロイン同士のドロドロした関係をお見せします！」みたいな内容だと……引くな、うん。

「作者は基本的にハッピーエンドやノーマルをフォローしてくれるんだ。だけど、その漫画にだって描かれなかったエピソードがある。その一部がBLだって可能性もあるだろう？　だけど、作者はそこまでフォロー出来ないから……公式では扱えないキャラ同士の関係を自分の好きなように空想できることも、魅力の一つであるように思うんだ」

「それが、新谷氏にとっての綺麗な世界なの？」

「俺が自由に想像……いや、妄想出来る、綺麗な世界ってことかな」

「なるほど……まあ、妄想は心の栄養だからね」

……思わず納得してしまった。それは多分、私も彼と同じ世界で楽しんでいるから。

その渦が大きくなって、みんなが好きな世界を好き勝手に空想して、集合して、BLという一つのジャンルを確立したのだろうか。ある意味では読者が生み出した新境地である。そう考えると凄いかも。

椅子の上で頷く私に、新谷氏は「まあ、あくまでも俺の価値観だけど」と付け加える。

こういう人物だから、一緒にいて互いに窮屈じゃないんだろう。

「いいじゃない。あたしはそういう新谷氏、好きだよ」

納得したので自分の正直な感想を告げて、私は椅子からおりて立ち上がった。

「うー……でも、こんな生活続けてたら、肩がこるなあ……」

そのまま腕を伸ばして思いつき背伸び。そんな私を新谷氏は無言で見つめている。

「ん？　どうかした？」

「あ、いや……何でもない。何か食べるか？」

私の質問から逃げるように冷蔵庫へ向かう新谷氏に少し疑問を抱きつつ……私はもう少し、柔軟体操を続けるのである。

とりあえず、この奇妙な関係はもうしばらく現状維持に違いないのだけだ。

お互い、没頭できる趣味があることは……きつと、前向きにとらえれば素晴らしいことに違いないから。

新谷氏買い置きのレストランカレーを御馳走になりながら、彼が読んでいた小説をパラパラとめくってみて……私がこの新しい世界に目覚めるのは大分遠い未来になるだろうと改めて実感したのだった。

二人のゲーム談義? (後書き)

BLって、美しい世界だと思っています。

新谷氏は見たくもないものを見てきたので、反動が激しかったんですね……嫌いじゃないわ! そう言ってあげてください。

女同士の内緒話

そんな沢城都と新谷薫の世にも奇妙な関係が続くためには、一部友人の協力が不可欠である。

例えば、私の場合、

「みーやこっ★」

彼女との待ち合わせ場所は、毎度おなじみになりつつある駅ビル地下のカフェ。店内は白で統一された明るい内装。デザートと軽食がお手頃価格で充実しているので、私たちみたいな若い娘さんがよく利用する。うん、目の保養。

ケーキセツのオレンジジュースで時間を稼いでいた私は、相変わらず快活な雰囲気全開で近づいてくる友人の姿に、思わずため息をついた。

彼女は後藤綾美。私とは高校で知り合った親友であり二次元文化仲間。攻め。今でも地元——ここから電車で片道1時間弱——の実家から専門学校に通っているのだけど、画材などを買いにこの商業地域まで足を運ぶことが多く、互いの都合がつけばこうしてお茶を飲んで雑談している。

少しくセのある長い髪の毛を一つにまとめ、高校時代から更に進化した、均整の取れたスタイルは私も憧れてしまう。今日は美脚ジーンズなんか着こなしちゃってさー……これで目は大きくて顔がきりっとした美人なのだから、神様はやっぱ不公平なのだと、というか彼女の遺伝子で究極美女が作れるんじゃないかと、色んなことを考えては自分が虚しくなるのである。

……ただ、彼女に交際を申し込んだ男は全員玉砕している。と、いうのも、彼女の好みは「テニス部の跡部様」であり、「でも、アスランみたいなタイプもいいわね」と平気で口に出すのだ。世の男はテニス部で跡部という苗字の男子部員を血眼で捜し（一人偶然い

たんだよなあ……あれは面白かった）、アスランという名前の外人タレントをネット検索するのだ。

っていうか綾美、君が言っている二人って……間逆だよ、うん。あえて突っ込まないけどさ。

さすがに全世界に対してBLラブとはカミングアウトしていないが、彼女は現役で同人誌を出している同人作家である。ちなみにコミケは基本シャッター前。最近は数多くの出版社からアンソロジーに参加しないかと話を持ちかけられるほどの腕前であり、姉御的な性格（実際はゴーイングマイウェイなだけ）との相乗効果で、固定ファンもイベントの度に増えているとか。

……ただ、私は彼女の売り子だけは、もう二度とやらないけど。

「綾美、遅いよ。集合時間は20分前だったと思うんだけど？」

「いやーゴメンゴメン。コンビニのコピー機が混雑しててさー」

私の正面に座った彼女は、B5サイズの書類がすっぽり収まるトートバックを足元において、

「でも、都もハイペースだね。正直、あんたがここまで好きになるなんて思わなかったんだけど」

私が飲んでいたコーラを横から掻っ攫い、にんまりとした笑みを向ける。

うーん……良心が痛むというか、何と言うか。

「はは、まあ……ね」

曖昧に笑って誤魔化すのは、彼女は私が彼の家に入り浸ってギャルゲーに精魂捧げていることを知らないからである……そもそも新谷氏のことだって、まだ彼女には話していない。

理由は単純。行動力だけは某世界を大いに盛り上げる団の団長に引けを取らない綾美である。新谷氏の存在を知れば最後、彼に引き合わせろ、仲間をむしろ自分に紹介しろとしつこく詰め寄ってくるはずなのだ。それは、綾美がオリジナル本を描く時のネタにするために違いない。

彼はあまり、自分の興味関心を表に出したくないみたいだから、

自室のパソコンまで借りている手前、これ以上迷惑をかけるわけにもいかない。

と、いうことで、今、「私がBLに興味を持ち始めたから、その筋では大先輩である綾美に本を借りて勉強させてください。とにかく色んな世界を知りたいの!」……ということにして、彼女から新谷氏へ横流しする本を借りているのである。

しかし、その話を持ちかけたときの彼女といったら……いきなり何事かという疑いの眼差しはどこにもない。私たちが初めて出会ったのが高校入学当時、偶然席が近くて当時私も読んでいた某テニス漫画の話題で異常に盛り上がったのがキッカだったけれど、その時以上の目の輝き。むしろ私が何事かと思っとうろたえたのだが、彼女がカバンからいきなり数冊取り出して一言、

「ただのBLには興味を示さなくていいわ! これを読みなさい!」
以上。

逆らうことの許されない命令形。

聞けば私がいつかその世界に目覚めることを信じて、初心者向けの小説を持ち歩いてくれていたと言うではないか。

……いや、そこまでしなくていいから。

元々彼女は親友で話の通じる私がギャルゲーに陶酔しているのがあまり面白くなかったのだ。「まあ、あたしも嫌いじゃないけどさ……コッチの世界の方も、むしろコッチの世界の方が、面白いと思うんだけどな」という、彼女にしてみれば控えめな言葉を、会う度にさり気なく口に出しては、ため息をついていた。そんな彼女を受け流すのが、毎回の通過儀礼。

だから最近、「本貸して」と一言メールを打てば電話がかかってくる。そこで読みたいジャンルなどを細かく聞かれ、すぐに時間と場所を指定され、いざ、待ち合わせ場所では、

「ハイ、持ってきたよー、例のシリーズ」

周囲にはほとんど無警戒で、ヲタモード全開フルスロットルなのである。

私も一応、学校では自分の趣味思考を隠蔽し、胸の奥に秘めて、大学では当たり障りのないように、エビちゃんとかもえちゃんとか（もえって言葉に反応してしまう自分がイヤだ……もえちゃんゴメン、可愛いから好き☆）、ドラマとか（見てないけど。テレビ雑誌の情報しか知らないけど）音楽とか（普段アニソンばかりだけど）……頑張って周囲に話を「合わせる」のである。いつしか「ふうん」とか「へえー」とか「ほおー」などという感嘆符が多くなり、人の話を聞いてるフリは、前よりももっと上手になったと思うよ。

ただ、綾美の前でエビちゃんの話に花を咲かせたことはない。私が櫻井さんの伊達眼鏡が好きだと言えば、彼女は福山さんの眼鏡の方が好きだという。私が神谷さんの話をすれば、彼女は小野さんの話題で返してくる。気がつけばそんな会話で数時間経過しているから世も末である。

私と同じくケーキセツト、加えてミニパフェまで頼んだ綾美が、周囲を一度だけ気にしてから、カバンの中へにゅっと手を突っ込んだ。

彼女のトートバックから出てきたのは、青い袋。濃い青なので中身までは確認できない。勿論、某店長が熱い店の袋である。うん、あの店は聖域、私たちのユートピア。コレは少し褒めすぎた？

ちなみに綾見の言う「例のシリーズ」とは、新谷氏が前回読んでいたシリーズの続編にあたる新作。うーん、私は表紙を見ただけで条件反射で拒否してしまったんだけど……ハネムーンのその後をシリーズ化しますか作者様。私たち読者に任せると、好き勝手に妄想して暴走するからですか？

「都もコレが好きなんて、さすがあたしの親友だわ。ねえ、やっぱ先輩受けの後輩攻めなカップリングが一番でしょ？」
彼女の生き生きした瞳が私に訴える。

う、聞かないでほしいだって私は読んでないから。

お昼過ぎのカフェで、ここから段々周囲からは理解不能な会話に興じる乙女が2人。

何も言わないでください。別に悪いことしてるわけでもありませんから。っていうか邪魔するな部外者。

綾美目当てで近づいてきた男を彼女自身が雰囲気と目で追いやり、私は相変わらずだなあと思いながら、残っていたジュースを喉に流し込んだ。

ただ、彼女が嬉々として私に意見を求めてくるのは予想できる。こういう事態に私だって何も備えていないわけではない。

したり顔で、いかにも「知ってます、ええ知ってますとも」という表情で、

「私はどっちかっていうと、保健医と先輩の方が好きかもなあ。だってあの先生、絶対先輩のこと狙ってるもん。夏のビーチにあの格好（ご想像にお任せします）で登場したときは、本気でどうしようかと思った。不覚にもときめいたね」

「あー分かる！ やっぱり都は目の付け所が違うわよね。大体、旅行先で偶然出会うわけがないっつーの。でも、あのイラストは傑作だったし、そういう策士で鬼畜な部分がそられるのよねー☆ 今度ドラマCDになるんだけどさ、先生の役って森川さんなんだって。嬉しくて、知り合いと思わず3時間メッセしちゃった」

ひとたび彼女好みの話に持っていけば、あとは延々と喋ってくれるのだ。ちなみにさっきのは新谷氏の意見である。彼からおおまかな内容とキャラクターに関する情報を聞いておけば、ある程度なら綾美の話にも付き合うことが可能。

そして多分数日後、私はこの作品のドラマCDを笑顔の綾美から手渡されるのだろう。KAT-TUNでも嵐でもなく、コレを。

うう、BLのドラマCDってどんな感じなんだろう……怖いもの見たさ（聞きたさ？）というか、私の好きな声優さんも出演してるらしいから（綾美情報）複雑というか。

「そういえば綾美、コピー機って……」

「ああ、今回はイベントまでちよつと時間がなくてコピー本になりそうなの。本当は新刊ナシでもいいかなって思っただけだよ……サイト結構要望のメールが多くてね。つい、頑張っちゃった★」
てへ、と笑う彼女だが、毎度のことに私は呆れる。

「またあ!?! 綾美の頑張り人間生活との交換条件で成立してるんだから……たまには10時間くらい寝なさいよね?」

「分かってるわよ。あとは綴じるだけだから、今日は布団で眠れそうだわ」

一体どれだけ修羅場だったんだ。特に目の下にくまがあるわけでもない、けろつとした顔で語る彼女に、私がこれ以上言うことはなにもない。

ちなみに、

「ねえ綾美、私がそっちの世界に足を踏み入れたっていうのに……相変わらず、本は見せてくれないのね」

彼女はこういうわけか、私に自分が書いている同人誌を見せてくれない。過去に売り子を頼まれたとき、私が中身を見ようとするとすごい勢いで止められたのだ。売り子なのに。

彼女のイラストは当然だが上手い。私も過去、彼女にイラストをもらったことがあるけど……本人が無理して描いたと言う割には、普段彼女が描かない美少女が完璧に微笑んでいたりして。

友人付き合いも地味に長いし、私が綾美の趣味嗜好をある程度理解している。今更何を見せられても動じないし、叫ばないし、白い目なんか向けないよ……うん、多分。

ジト目を向けて訴える私に、彼女はパフェをつつきながら、無駄に綺麗な（この表現はひがみ）、それでいて妙に悪戯な表情で返答するのである。

「あたしの本はまだまだ、初心者の中には刺激が強すぎるからね」

うん、そうだと思う。心の中で素直に納得しながら、彼女から預かった文庫本数冊を、自分のバックにしまいこむのであった。

後日、新谷氏に小説を渡す際、何となく綾美の話（本を提供してくれる友人の話）になり、私が彼女は同人作家で、こんな名前で活動しているんだよー……ということぼつりと呟いた。綾美のPNを彼に告げたのは、何かのアンソロジーで読んだことがあるかもしれないと思ったからんだけど、

「マジで！？ あの人、沢城の親友なのか！？」

という、予想以上の食いつき。

「あ、知ってたんだ。まあ、最近色んなアンソロにも参加してるみたいだし……」

「あ、あのさ……」

……唐突にスケッチブックを手渡された。
どこから出したんだ、これ。

意図を察してとりあえず受け取るものの、私を見つめる新谷氏が尋常じゃないほど目を輝かせている。そんなキラッキラさせなくても分かってるよ。ちゃんとフルカラーで描いてもらうから。

ただ、

「キャラのリクエストはないの？」

何となく聞いてみたけれど、返ってきたのは意外すぎる答えだった。

「だ、誰でもいいに決まってるだろ！ でも、あえて言うなら「Fa○e」のアーチャーかランサーが……」

「ちよっ……そのカップリングには一定の理解を示すけどどうしてギャルゲーなの！？」

「沢城こそどうして知らないんだ！？ あの人を受けのアーチャーを描かせたら日本一なんだぞ！」

「ちよっ……！ 私の（心の）兄貴を受けとか言わないでーっ！！」

……私の親友のPNが業界の常連になるまで、あまり時間はかからない、の、かもしれない。

女同士の内緒話（後書き）

霧原も種アスランは好きです。他のメイン男キャラと比べれば……。　（遠い目）

テニプリでは大石先輩が好きです。一番堅実そうなもの！　手塚部長には眩しくて近づけないに決まっています！

真面目なキツカケ

でも、よく考えなくても改めて認識するべきだったのだ。

彼——新谷薫は、こんな感じだけど、基本スペックは女の子に好かれるビジュアルと性格であるということに。

大学で仲良くしている友人の間でも、新谷氏はよく知られていた。むしろ、私が周囲の情報に疎いだけかもしれないけど……そこで聞いたのが、こんな、噂。

噂1…高校生の頃は女教師と付き合っていたらしい。（しかも教師から告白してきた）

噂2…珍しいほど優しく実直な性格で、困った人は見過ごせない。

噂3…大学に入学してから二桁を超える告白を受けている。（全て断っている）

噂4…実は彼女がいる。遠距離恋愛中でメール交換をマメに行っているらしい。

噂5…実は女に興味がないらしい。

「さあ、真実はどれなの新谷氏？」

「……そんな噂、本人に向かって聞かないでくれ」

学園ゲームで裏ルートの担任教師エンディングを見終わった余韻に浸りつつ（いい仕事しました）、教師繋がりがってことでそんな噂を思い出した私は、不意に聞いてみる。

私が聞いたことを正直に伝えると、最初は自分の世界から出てこなかった彼も……うんざりした表情で私のほうを見上げた。

そんなくだらないことで俺の世界を邪魔するな、彼の目が訴えているも、私は別に気にしない。彼の過去にズカズカと土足で侵入、なのである。

……まあ、そういうネタには興味あるし、正直。

ただ、自分の行動にも少し気をつけなきゃいけないかな、と、思い始めていた。私がギャルゲー目的とはいえ、彼の部屋に入り浸っていることは事実なのだ。変に「付き合ってる」なんて噂が流れたら、間違いなく彼に大きな迷惑がかかってしまうから。

だからこそ、今、もしも「付き合ってる人がいる」なんてことだったら……私はこの部屋のパソコンをどうやって自室に持ち込むかを検討しなければならなくなってくるのである。まあ、そんな噂は聞いているから大丈夫だと思いたいけれど。

「じゃあ、全部本当なの？ 高校生の頃に女教師と付き合ってたのも、実はやっぱりガチムチ兄貴にしか興味がないっていうのも本当？」

「……付き合ってない。断った。そして俺は兄貴に興味は……ない、ない」

口ごもりながらも白状する新谷氏。

ってヲイ、後半はあえて何も言わないが告白されたのは本当なのかよ！

思わず絶句しつつ、ふと、先ほどのゲームの内容が頭の中でリフレイン。私が思う「女教師」の基本スペックを並べてみる。

「ねえ、どんな先生だったのか聞いていい？ やっぱりツリ目の美人教師でタイトスカート、ストッキングは必須アイテム？」

ステレオタイプで申し訳ないが、私が思い描く「女教師」を単語にして並べると、新谷氏が完全に呆れた表情で首を振った。

「俺が男子校だったからかもしれないけど……あまり生徒を刺激するなってことで、そこまで露骨な教師はいなかったよ。まあ……例外もいたけど」

「でも、新谷氏に言い寄ってきたのは、それこそ若くて美人だったんでしょ？」

「……そりゃあ、まあ」

「スタイル抜群で、胸なんかグラビアアイドル並みで、でもしっか

りウエスト締まって、ストッキングが……」

「ストッキング好きだな沢城」

「当たり前でしょう！？ ストッキングをはいてない女教師なんか認めないわ！」

そう、女教師にストッキングがないなんて邪道よっ！

そんな私の叫びを苦笑で受け止めた彼は、床からベッドに座り直す……私と目線を合わせて、

「まあ、沢城は何か別の印象を持ってるかもしれないけど……俺はあの先生のおかげで女性が怖くなったんだよな……ストーリーカーみたいで、参ったよ」

何か思い出したのだろう。表情が渋くなる。

その言葉を聞いた瞬間、頭の中で散々美化していた女教師の図（実際は顔も名前も知らないけど）に、ビシッと亀裂が入った。

うーん、いくらなんでも教え子をストーリーキングしちゃダメでしょ大人なんだから。

「それはちよつとねえ……そんな教師に個人レッスンされても嬉しくないわ」

「全くだよ。おかげで今も「女性」は怖いんだよなあ……」

しみじみ呟いた彼に、一瞬、目が離せなくなる。

同時に前々から思っていたのだが、改めて確信することが一つ。新谷氏、奴は私を女だと思ってないな。今更だけど。

でも、本人は気がついていないのかもしれない。その無駄に爽やかで無防備な笑顔が、ギャルゲーの主人公になれる素質のひとつなんだってことに。

そうか、だからヒロインはみんな主人公に好意を寄せるのかな。

「……鈍感だね、新谷氏は」

「？」

ほらね、絶対気がついてない。

キミは多分、自分が思っている以上に異性を引き寄せてしまうんだよ。不本意かもしれないけれど。

名付けて、ギャルゲー主人公体質。主人公スペック装備でもいいや。

「気がついてないならいいよ、大したことじゃないし。さて、とりあえずこのゲームはフルコンプしたから……次は久しぶりにシリアスカハードなやつやりたいなあ。ホラーか陵辱か、あ、あんまし触手は好きじゃないからソツチ系は勘弁してもらいたいんだけど」

さり気なく次回作をリクエストする私。彼は苦笑で「分かった」と了承し、ふと、

「そういえば……どうして沢城はギャルゲーが好きなんだ？ 世の中には乙女ゲーもあるっていうのに」

新谷氏の何気ない、それでいてもっともな質問は、過去、綾美に興味本位で借りたとあるゲームを思い出させた。ちなみに乙女ゲーとは、主人公が女の子で、男の子と親睦を深めているゲームである。ア○ジェリークや金○のコルダなどなど。

まあ、綾美にしてみれば……乙女ゲーはキャラクターやネタの宝庫である。だからわざわざ持ってるんだろうけど。

「うーん……乙女ゲーは嫌いじゃないの。むしろネオ○マンスとかキャラ萌えよ？ 声聞いただけで、ボタン押すたびに画面の向こうで悶えてたわよ」

フルボイスのゲームに慣れていなかった頃は、逐一喋ってくれるサードビス満点のゲームに、一人、そりゃあもう興奮していた頃もある。今でも多分同じ反応だと思うけど。

「ただ、前に綾美にゲームを借りたんだけどね……10時間頑張つてフラグ立てて親近感アップさせても、どこをどう間違ったのか全然違うキャラのエンディング（しかもそのキャラは個人的にどーでもよかった）になりそうになったとき、一気に冷めちゃったのよね。今までのラブラブ寸止めイベントは何だったんだ！ って、思っちゃって」

まあ、攻略本を頑なに拒否した私にも非はあるのだが……あの時の悔しさは、まだしばらく忘れられない。こういうのを「トラウマ」

と呼んでいいのかどうか迷うところだが、私にしてみれば立派なトラウマだ。

「で、改めて気付いたのよ。私、沢城都は基本的にイラストは可愛い女の子が好きだなんて。ギャルゲーならよほどのことがない限り目当てのヒロインにたどり着けるし、イベントも豊富だし、何より最近ではシナリオ重視だけじゃなくてグラフィック綺麗だし。特別男の人に興味がないし、こういう性格だから……二次元で可愛い女の子を口説けることが楽しいなあ、とね」

最近では、ギャルゲーの原画を女性が描くことも多くなっている。私が好きな原画家も、半分以上女性だ。

女の子だって……可愛い女の子は好きなんだよ？ 女性の原画家にしか描けない繊細なキャラクターイラストに、どうしても賛同してしまう。

世の中の女の子はあんなに細くもないしボインでもないし、毛が……ダメダメ自主規制。何でもないですよ、ええ、何でもありませんとも。

私がゲームに求めているのはリアルじゃないんだ。「好き」って言葉に込められているのは、リアルな願望だけじゃない。

そして、私が求めているのは、そんなリアルじゃない。

「本気で女の子と恋人になりたいなんて思っていないわ。ただ、そんなにリアルばかり追いかけたって疲れちゃうよ。私の場合、現実逃避の方法がギャルゲーで、それが自分に合ってたってだけだと思う。世の中にはアイドルを追っかける人も大勢いるわけだしね。私みたいな亜種が生まれたって、現代日本の風潮を考慮すれば、可能性はゼロにならないと思うけど。それに……だったら新谷氏だって同じでしょ？」

ゲームに明確な性別はないと思ってる。面白いと、好きだと思っただけ人間が楽しめるばい。

空想でいいんだ。架空でいいんだ。むしろ……その方が、いいんだ。

現実ばかり見ると疲れてしまうから。逃げ場のない人生なんて、両脇から壁が迫ってくる日々。ただ潰されるのを待つだけなんて冗談じゃない。私はその壁に穴をあけて、たまに抜け出している、多分そういうことなんだと思う。

そして、穴を開けた先にあった世界がギャルゲーの世界だった。

そういうことなんだろう。

そういうことにしておこう。

そういうことにさせてください。

椅子の上に胡坐をかいて返答した私に、彼はしばしばかんとした表情を向け……そして、

「はぁ……やっぱ、カッコいいよ、沢城は」

大袈裟に息をつきながら、しみじみと呟く。

言われた私は、目を丸くして聞き返した。

「そう？」

「自分の意見を隠さずはつきり言うって、なかなか出来ないと思うんだ。そりゃあ、俺はある意味沢城の仲間だから、遠慮する必要もないけど……でもやっぱ、カッコいいよ。うん、俺はそう思う」

どうやら今、彼から褒められているらしい。予想外の展開に、私は気恥ずかしくて言葉が続かなくなり……適当な受け言葉で話を切り替えようとした。

ただ、次の瞬間。

このギャルゲー主人公体質の新谷薫は、笑顔でこう言ったのである。

「沢城が彼女だったら……少しは俺も変われるかもな」

——どうということ、だろう。

「なーにを血迷った発言しちゃってるんだか。それに、新谷氏はすつごく可愛い女の子を連れて、私の目を楽しませてくれなきゃつまらないじゃない」

言い返してはみたものの、鼓動が、早くなる。

何だろう、これ。フラグ立てられた？ それともミスリード？

彼の言葉……深読みしても、いい？

真面目なキツカケ（後書き）

都の言っていることは私の実体験でもあります……遙か……。

後輩、襲来。

約束が口実になっている……？

そんなことをふと考えたのは、新谷氏宅の玄関前で立ち往生していた時だった。

夕方から降り始めた雨が、少しだけ、激しくなっている気がする。

現在時刻は午後10時過ぎ、いつもの玄関前。

今日はお互い夕方からアルバイトで……そして、明日が祝日なのだから、思う存分夜に（個々人の時間を）楽しもう、そんなノリで話がまとまったのは、3日ほど前になるだろうか。

彼が、私がやりたいと思っていたソフトを手に入れて……でも、なぜだかこんなときに時間的な都合がつけられなくて、まだ第2章までしか進められず、すれ違ったまま、今日までお預けの生殺し。授業にもバイトにも集中できなかった自分に呆れるしかないだろう。

そして、本日、バイトを終えて——私は雑誌で見たときから狙っていた同級生の風華ちゃんを攻略できると、ようやく彼女に逢えるのと、そりゃーもう鼻歌交じりで手土産まで持ってやって来たというのに。

ロングヘアーでロリボイス、でも出るところはしっかり出ているモデル体型、しっかり者だけどいたずら好き、その性格と体で主人公を骨抜きにしていく様が、楽しみでしようがないというのに。

部屋の主がいなければ、どうにもならないじゃないか。

勿論私は合鍵なんか持っていない。10分ほど夜空を見上げつつ新谷氏にメールを送ると、「もうすぐ帰る」という簡素な一文が戻ってきた。

別に風華ちゃんは逃げないんだけど……でも、これを励みに今日

の今まで頑張ってきたんだ。ちなみに私のバイト先はレンタルショップなんだけど、返却されたDVDを並べながらため息をついた日々にサヨナラなんだからっ！

期待に胸を膨らませつつも、風が吹きすさぶココは4階。新谷氏の帰りが5分後なのか30分後なのか分からないし、何より体が冷えてしまったので近くのコンビニで時間を潰そうという結論に達した私は、冷えた体を一度抱えてため息をつく。

かすかに白い息が、暗い夜空に溶けた。

――と。

位置的には反対側、廊下の突き当たりにあるエレベーターホール
の床に、明かりが灯った。エレベーターがこの階で止まったという
印でもある。

まあ、新谷氏じゃない可能性も否定出来ないんだけど……私は歩
みを止め、降りてくる人物の顔を拝むことにする。

「……別にいいじゃないですかあ。先輩、一人暮らしなんですよね
？」

扉が開くと同時に響いたのは、ロリボイスだった。

私の感性を刺激する声は、体験版で聞いた風華ちゃんを連想させ
る。

でも、女性ってことは違うか……私がコンビニ行きを再度決心し
た瞬間、

「……あ、沢城」

少し遅れてエレベーターから降りてきた新谷氏と目が合い、彼が
私の名前を呟いた。

そして、彼が私を見つめているということに……彼女も、気がつく。

何だろうこのシチュエーションは。

寒々したとした空気が、余計に冷たく感じた。

「先輩、彼女……いたんですか？」

瞬間、私を見つめる彼女の目が鋭くなった、ような気がする。

隣にいる新谷氏は無言で私を見つめ……何やら、私に目で訴えかけているようだ。

だけど、今の私はそれどころじゃない。

だって、だってだってだって。

新谷氏の隣にるのが、雑誌から飛び出てきたような美少女だったから!!

腰近くまで伸びた黒髪ストレート、ティーン誌のモデルのようにパーツ狂いのない顔、っていうか目がデカイ。反則、その大きさは反則。

どこかで見たことあるような顔だなあと思っていたのだが……そうそう、この間声グラ——声優雑誌——で見た某声優さんに何となく似てるんだ。彼女も可愛いんだよねえ、声だけじゃなくて顔も。そして、先ほどから響くロリボイス……画面の中にしか存在しないはずの風華ちゃんがそこにいた。彼女の名前も年齢も知らないけど、目の前にリアル風華ちゃんがいる。私の中でそういう情報ばかりが勝手にインプットされて、本人の知らない所で定着していく。惜しいのは……非常に失礼だが、体の発育が風華ちゃんに及ばない点だ。でも、それはそれでいいと思うよ。うん、ロリボイスなんだから小柄なロリ体系でもいいよね？

私の頭で自分勝手な分析がなされていることなど知るはずもない彼女は、私が脳内妄想に夢中で彼らに対して何も言わないことに焦

っているのか……少し目を吊り上げて（いや、それも十分可愛いんだけど……さっきから私変態みたいじゃん）、こう言った。

「それとも、先輩の追っかけですか？ 残念ですけど、私の方が先に用事があるんです。部外者は引っ込んでもらえませんか？」

なぬ、今の言葉は聞き捨てならない。彼女が彼の部屋に外泊するのは構わないのだが……今日だけは、今日だけは遠慮してもらわないと。

だって、私の風華ちゃんが早く攻略してってパソコンの中で待ってるんだから！（多分）

——と、カバンの中で携帯電話が鳴る。メール着信音だったのでカバンから取り出して確認すると……送信者は新谷氏ではないか。何事だろう。とりあえず本文を確認。そして……ため息。

「……それくらい、自分で何とかしなさいよ」

ほれ見たことか、やっぱり主人公体質なんだから。

私は携帯をしまつて、こちらを睨んでいる彼女と視線を合わせた。……こんな日じゃなかったら、友達になって制服とか……ってマテマテ、違うから、そうじゃないから！

声が引きつらないように注意しながら、初めて、彼女に言葉をかける。

「か、薰ってば……女の子に優しいのは分かってるけど、そんな可愛い女の子を連れ込むつもりだったんだ。ふーん、私じゃ不満なんだ、へえー？」

「あ、いやその……これは……」

どうやらこの返しは予想していなかったらしい。彼女よりも新谷氏の方が明らかにうろたえているではないか。ダメちゃん、しっかりしろ新谷氏！

私はつかつかと2人に近づくと、私を睨む彼女から半ば強引に彼を引き剥がし、

「今から2人でじっくり話し合う必要があると思わない？　ここま
で連れてきた可愛い彼女には申し訳ないけど……」

適当に腕を絡め、にやりと笑ってみた。

そしてそのまま、彼を部屋まで引っ張っていく。

……しかし、私には一つだけ、聞いておきたいことがあった。
それは、

「薫、彼女を私に紹介してくれないの？」

お願いします名前と年齢を教えてください。

新谷氏が口を開く前に、無然としたロリ声が返ってきた。

「宮崎林檎です。新谷先輩とは地元が同じで……」

なるほど、林檎ちゃん、可愛い名前だ。

同時に脳内で年齢を計算する。新谷氏は一浪しているので、年齢
的には私より一つ年上。もしかしたら、私と林檎ちゃんって同じ歳
？　信じられない……色んな意味で。

「林檎ちゃん、ゴメンね。今日はちょっと、彼を貸せそうにないわ」
「結構です！　私、そんなつもりじゃありませんからっ！」

明らかな不機嫌。じゃあどんなつもりだったんだと尋ねたいところ
だが……ムキになってるところも可愛いじゃないか。

彼女——林檎ちゃんは吐き捨てたところできびすをかえし、先ほ
ど乗ってきたエレベーターに乗って……見えなくなった。

その後姿を見送ってから……再度、ため息をつく。

絡めていた腕をほどくと、冷たい風が通り抜けた。

「……助かったよ、助かったけど……沢城、そのキャラは何だ？」

私の方を見ないまま、彼がぼそりと尋ねる。

「えっと……この間攻略した女の先生がカッコいいなあと思って……
私もいつか言ってみたいセリフストックから引き出してみただ
けど、どうだった？　ちゃんとそれっぽく見えたかなあ」

新谷氏が先ほど送ってきたメール。その本文はたった一言。

「設定は何でもいいから何とかしてくれ」

これだけで察して行動した私を誰か褒めてほしい。

……まあ、さすが主人公体質。女の子を引き寄せるフェロモン（？）は健在ってわけか。

「っていうか……彼女、何者？」

ただ、ここまで新谷氏が押されるのも珍しい。普段はああいう女の子を上手くかわしている印象があるから。

私の質問に、彼は鞆から鍵を探しながら呟く。

「……バイト先が同じ後輩。地元が同じだし、今は大学も同じなんだ」

「なるほど。それは、かわいそーに……」

カッコよくて優しくて、まるで漫画から飛び出してきたような、非の打ちどころのない先輩。彼女に二次元への理解があるかどうかは知らないし、そんなギャップに萌えてくれるかも分からないが……新谷氏の新たな一面を知った彼女を見てみたい気もするなあ。

そんなことを思っていると……新谷氏が鍵を開けたので、私も続いて部屋に入る。

当然だが室内は暗い。先に入った彼は電気をつけるより早く、玄関脇にある風呂場のドアにかかっていたバスタオルを取ると、それを……無造作に私の頭へバサリと落下させるではないか。

靴を脱いで室内へ一歩踏み出そうとしていた私は、唐突な状況に対処できずに……結果、大袈裟なくらいバランスを崩してしまった。

「うあっ！　ちょ……！！！」

前のめりになった。重心が傾いた体はそのまま床に引き寄せられる。何も見えないから手をつこうと思ってても体が反応しない！

床に額が激突する最悪の未来が間近まで迫った、次の瞬間。

「沢城！？」

彼の声が響き、そして、

「大丈夫か？」

頭から白いバスタオルを被ったままの私は、多分、危険を察知してくれた新谷氏に助けられたのだろう。まあ、構図的に抱きしめられてるような姿勢なのはしょうがない……前が見えないからそんな構図かどうかは分からないけど……でも、力強い腕の感覚は、事実。初めての体験に状況把握能力が追い付かず、頭が真っ白になった私は、

「い、いきなりバスタオルで視界を塞がないでよ！　せめて何か一言何か言ってほしいなあっ！」

声が、不自然に上ずった。

「ゴメン。結構濡れてるみたいだったから……」

新谷氏の声が、今までで最も近くから聞こえてくる。

冷たかったはずの体が、妙な熱を帯び始めているのを感じる。

悟られたくない、心が疼いて……鼓動が、速くなる。

「ありがと。とりあえずもう大丈夫だから、離して――」

私は彼から離れようと、軽く身をよじらせた。

だけど。

「あ、れ……？」

腕の拘束から逃れられない。何が起きているのか、全く、分からない。

彼の顔を見て表情を確認したいけど……何も、見えないから。どうして？

新谷氏、どうして？

「沢城が彼女だったら……少しは俺も変われるかもな」

刹那、いつかの言葉が頭の中でリフレインした。でも、彼は素でさらりとああいいうことを言ってしまうタイプだ。そう自分に言い聞かせて……深読みしないようにしてきたのに。

新谷氏が、見えない。

分からないよ、君のことが。

「ねえ、どうしたの？ 一体何が……」

「――ゴメン。少し、黙って」

刹那、再び耳元で低い声が響いた。反射的に身をすくめる。同時に、今まで感じたことのない彼に……首を、かしげる。

「新谷氏……？」

彼が震えているのが、バスタオル越しにはっきりと伝わってきた。

後輩、襲来。（後書き）

ライバルがロリなのは大自然の定理です。

主人公属性は辛いよ（前書き）

ちよこつと濃いめの恋愛的描写があります。
そしてそれは、次の話まで続きます。

主人公属性は辛いよ

新谷氏の部屋はワンルームなので、扉をくぐれば目の前が居住スペース、玄関脇の右にバストイレ、左にキッチン。

パソコンはそんな部屋の一番奥にある。私が目指すその場所までが、妙に、遠い。

「ど、どうしたのよいきなり。雨に打たれて風邪引いちゃった？」
いきなり看病イベント突入！？ 私、フラグ立てたつもりはないのに！？」

いや、だとすれば……な、なんてベタな……まさか自分の身で体験するとは思っていなくて、選択肢を提示してくれない現実世界（当たり前）に混乱寸前。

ええっと……看病イベントの場合、大抵相手がベッドでうなされていて、私は手を握るとか、おかゆを食べさせるとか、薬を口移しで、っていうのは風邪がうつりそうだなあ……って違う！ そうじゃない！ 妄想しすぎだよ沢城都！

いつかの乙女ゲーを思い出し、バスタオルの下で赤面した。ギャルゲーに看病イベントは……あまりないような気がする。体を拭くという口実で服を脱がせるとか、風邪を引くのは主人公で、女の子が頑張って癒してくれるとか、そういう使い方だっけ。

……だから違うでしょう、こんな時に何を考えているんだ私は。混乱しながらもおなじみの思考回路に、失笑どころではない。呆れて何も言えなくなってしまう。

だけど……。

「ねえ、新谷氏、何事？ 説明してもらわないと……これじゃあ訳が分からないよ」

落ち着いたトーンで聞いてみる。だけど、彼は私をぎゅっと抱きしめたまま硬直。フリーズ。

しょうがないので、私はある作戦を決行することにする。

「ねえってば——薰っ!!」

私が彼を名前で呼んだ瞬間。

彼は慌てて私を解放した。

頭から被っていたバスタオルを取り、ようやく取り戻した視界に彼を捉える。

私の正面にいる新谷氏は……バツの悪そうな、でも、少しだけ泣きそうな面持ちで、一言「ゴメン」と呟いた。

「名前で呼ばれるの……やっぱり嫌なんだね」

私がさっき、キャラを作って林檎ちゃんを追い返したときに彼を名前で呼んだ瞬間、明らかに戸惑っていたというか……辛そうに、見えたから。

私は、彼が私のキャラを予想していなかったからだろうと思ったんだけど……でも、もし、理由がほかにあるのだとしたら。

「じゃあ、さっきは知らなかったとはいえ、ごめん」

ここは素直に一言謝罪を入れた。彼に辛い過去を思い出させてしまったのかもしれない。

彼は首を横にふって、ぽつりと呟いた。

「沢城は悪くない。俺がダメで……まだ、思い出すんだ、色々……」

色々——その一言に凝縮された過去が一体何なのか。付き合いの短い私には理解できないけど、

「その色々が何なのかは特に聞かないよ。だけどね、新谷氏……一言だけ、これだけは言わせてもらっていいかな？」

根掘り葉掘り聞くつもりはない。私が聞くような話でもないと思うし、私が彼に優しい言葉をかけたとしても、それは、過去の傷をいたずらにえぐるだけになりそうだから。

だけど、私はどうしても、彼に言っておかなければならないことがある。

もしかしたら、今までにも言われてきたのかもしれないけど……彼自身が気がついていないこと、そして、出来るならば気がついたほうがいいこと。気がついてほしいこと。

「新谷氏、君は典型的な主人公属性なんだから……もうちょっと気をつけたほうがいいと思うよ」

「主人公属性……？」

「言葉を選ばず具体的に言えば、新谷薫はイケメンで誰に対しても優しく社交性もあって一人暮らしで……そして、自分が思ってる以上に周囲に鈍感ってこと」

びしりと断言した私に、彼の表情が強張る。
ここまで言っているのかどうか、正直迷った。

だけど、もし、これを指摘しないで今後もこんなことが続くのなら……さすがの私も、きっと耐えられない。そんな優しさ、最初からいらない。

「女の立場から忠告させて。新谷氏、思わせぶりな言葉をかけるのも、抱きしめるのも……自分が好きな子だけにしておかなくちゃダメだと思うな。優しいのは性格だし、短所じゃないと思うから無理に変える必要はないと思う。ただね……もし、今日みたいなことがあと何回か続いたら、きっと、私だって勘違いしちゃうし」

そう、新谷氏……君は優しい。

だけど、そういう優しさが時に人を傷つけるナイフになってしまうこと、多分、言われなくても分かっていると思うから。

部外者である私が言えるのは、ここまでのだ。ここから先は、彼がどう意識して、行動するか。

私の言葉を黙って聞いていた新谷氏は、うつむいたまま、何も言わない。

今日は……ゲーム、無理っぽいな。部屋の奥で私を待ってくれていた（であろう）風華ちゃんに心の中で謝りながら、「今日は……帰るね」と、まるで喧嘩した恋人が気まずい空気のまま部屋から出て行くような言葉を残して、寮に帰ろうときびすを返した。

だけど。

物語はココで終わりじゃない。むしろ……ココからが本番。

「――鈍感なのはどっちだよ！」

靴を履こうとした瞬間、背後から聞こえたのは――絶叫。

壁が薄いマンションで近所迷惑という言葉を排除した新谷氏は、びっくりして振り向いた私に、今まで見せたことのない表情を向ける。

眼鏡の奥、綺麗な瞳を……最大限まで吊り上げて。

……あれ？ 私、もしかして地雷を踏んでしまった？

「新谷、氏？」

「俺だって学習能力がないわけじゃない。自分の行動がトラブルの引き金になってることも……今まで散々言われてきたよ。だから……やめようって、好きな子の前以外では自分の態度に気をつけようって、思ってきた。実践してるつもりなんだ」

――かちんと、きた。その言葉が今以上にふさわしい場面に出会ったことがないくらい、かちんと。

実践してる？ 誰が？ 何を？

前の言葉、そして先ほどの態度。

彼の行動を思い返した私の中で、花火に似た怒りが大きく弾ける。「じゃあ、さっきのはどう説明するのよ！ 言ってることとやっていることが違うじゃない！」

「だから察しろよ！ 沢城、お前は全然気がついてないみたいだから指摘してやる。お前だって俺から言わせれば……そう、乙女ゲー

ムの主人公体質だよ!」

「なあっ!？」

な……誰が、何だって!？」

予想外の反撃に、声が裏返った。

呆然と立ち尽くして防御もしない私へ、激昂した彼が攻撃を続ける。

「俺は乙女ゲームに関して詳しいわけじゃないけど……主人公の基本スペックは同じだろう? 沢城都は明るくて負けん気が強くて自分に正直で周囲に鈍感で……それで、」

「そ……それ、で？」

さり気なくビジュアルに関する言葉を避けたことは、後からしっかり追及させてもらうけど。

もはや怒りを忘れて興味津々の私。彼は少し口ごもったあと、小さく、呟いた。

「……危なっかしくて、目が離せないんだよ」
「？」

先ほどの怒りは恐らく失速している。私は必死に彼の言葉を自分に置き換えながら……ふと、

「私、そんなに危なっかしい？」

思いついたことがあるので、

「ああ、そうやって自覚がないところが特に」

「例えば？」

正面から見据え、尋ねてみる。

「だから——!」

苛立たしげに言いかけた彼の口が、私の顔を見て止まった。

私の、苦笑いとも確信犯とも言えないような、絶妙な表情に。

「沢城!？」

悟った彼が、赤面して非難じみた声をあげるが……あーもダメ、我慢できない。

私はその場でペタンとしゃがみ込むと、体を丸めて笑いかみ殺

す。全然殺せていないけど。

「あは……ごめ、ゴメン、新谷氏。でもねえ……なんつつーかもう、本当にゲームのイベントみたいで……いきなり怒鳴ると思ったら口ごもるし、もう、途中から見ていておなかいっぱいになったよ。ありがとう……うん、ご飯3杯はいける」

「さ、おまっ……お前、最低だぞそういうの！」

「最低で結構……ははっ、あーもーダメ、萌え死ぬ、かぁいいからお持ち帰りしたいし、キュン死にしちゃう、新谷氏が私を悶え殺す」
「！」

「今は勝手に死んでろ！」

随分とヒドイ言葉を吐き捨てた彼だが……私は、座り込んだまま彼を見上げ、やっぱり笑ってしまうのだ。

うーん、目の前にリアルツンデレ（多分）がいる。眼鏡男子には結構ツンデレが多いと思っではいたけど……っていうか、男の場合もツンデレって言うのかしら。誰か教えてくれないかな。

「新谷氏、怒ってる？」

「パソコンを今すぐ起動して沢城のセーブデータだけ全消去したいくらい怒ってる」

「ええ！？ それは絶対ダメっ！」

本気にも冗談とも取れない冷めた声に焦った私は、慌てて立ち上がった。

互いを見つめる瞳が、苦笑いであることに気づく。

「ねえ、新谷氏……私たち、何を言い合ってるんだろうねえ」

「言い始めたのは沢城だろ？」

「そりゃあそうだけど……まあいいや。話を整理しよう？」

私の言葉に一度頷いた彼は、不意に、左手を突き出した。

……何故？

「あれ、新谷氏？」

「いいから」

この状況で握手？ 仲直りってことかな……私は特に迷うことも

なく彼の手を握った。刹那、

「へえあっ!？」

いきなりその手を引っ張られ、よろける。喉の奥から変な声が出たのは気にしない。

気がついたら彼にもたれかかっていた。ついさっきもこんな状況になったなあと思いつながら、私が何とか体勢を整えていると、

「……誰に対しても言ってるわけじゃないから」

不意に。

耳元でダイレクトに囁かれた言葉には、初めて感じる破壊力がある。

「沢城だから……フラグ立てたいなって、思ったんだからな」

フラグを立てる。

それは今まで、あたしが画面の中に向けて行ってきたこと。

それが私に対して立てられた、ってことは……。

「それは……私ルートに突入するってことだよ？ リセット出来ないよ?」

「いいよ。このルートしか狙ってなかったから」

正直に言われると、言葉を返せなくなる。

私は新谷氏を見上げてみた。

眼鏡越しに見下ろす彼は、間近で見れば見るほど破壊力抜群というか、今までこんな人が近くにいて特に何とも思わなかった自分はやっぱり色々ダメなんじゃないかとか……思うことは色々あるけれども。

ただ、出会った時から変わらないのは、私を見つめる優しい眼差し。

少し呆れてるけど、でも、それは否定じゃない。「それでいい」って認めてくれているような気がして、肩の力が抜けるんだ。

少しきこちなく、彼の腕が私の背中に触れた。同時に私は体重を預ける。ただ、私は不思議と、さっきみたいに緊張することもなく……自分の手はどうしようか、そんなことばかり考えていて。

「沢城って、さ」

「ん？」

「意外と着やせするタイプ？」

「着やせ？ それって……太ってるって言いたいの？」

「……いや、やっぱいい」

「？」

ゲームでもたまに出てくる表現だが、自分に対して言われたことがなかったので意味がよく分からない。首をかしげる私に真意を告げることはないまま、新谷氏は静かに、私を抱きしめていた。

「沢城は……嫌じゃない？」

この状況で確認する彼に、思わず失笑してしまう。

だって、

「嫌だったら、とっくに抵抗してるよ」

だから私も、いつの間にか……彼の背中に腕を回していたんだ。

そして、結局。

“『……いいですよ、敬一さんになら……私……』”

頬を赤らめながら告げてくれた彼女の言葉が、僕は何よりも嬉しくて。

愛しい彼女を抱きしめる。柔らかな体に、心臓が大きく波打った。

『敬一、さん……』

『風華……』

互いの名前を呼び合った後、僕たちは、静かに唇を――”

「……キスシーンは既存CGの使いまわしか……」

画面が切り替わった瞬間、不機嫌な自分の言葉で現実に戻さ

れる。

現在物語は第5章。共通ルートを終え、念願の風華ちゃんルートに突入したのだが……ようやく主人公（敬一）が彼女に告白して、キスしたところである。長い、こ　こまで長かったよ……水着でのイベントは後半にも登場するんでしょね？　恋人になる前と後では、水着の扱われ方も変わってくるんだから！

「……家に送ってこの章は終わりかああ……ああもう、そういうゲームなんだから、さっさとやることやっちゃえばいいのに……話がすすまないっつーの……！」

椅子に胡坐をかいて、持ってきたポッキーを口に入れると（メツセージはオートだから、クリックしたりする必要がないのだ）……黙々と読書に興じていた彼が、よっこらせと立ち上がった。

ちなみに、本日の私からの手土産は……まだ私でさえも見たことのない、綾美の同人誌である。彼女に新谷氏から頼まれたスケッチブックを渡し、事情をあれこれ白状したところ……新谷氏がBL初心者ではないことを知った彼女が、黒い袋に入れて私へ手渡した一品。勿論、私は閲覧不可。

最初は私がゲームをプレイすることに渋い顔をしていたが、彼女の本を渡した瞬間、私に背を向けやがったのよ彼ってば。

それからは黙として語らず、ひたすら読みふけている。私が軽く嫉妬するくらいに。

だからもう、開き直ってやる。私は今日、風華ちゃんに逢いに来たのだ。途中色々ありすぎて遅くなったけど、彼女と幸せな学園ライフをエンジョイするためにやって来たんだからっ！

……そんな感じで、結局、互いがいつものように個人作業に没頭して2時間ほど。

私はイヤホンをつけてプレイしているので、彼には私が一人で画面に向かって愚痴っているようにしか見えないだろう。

冷蔵庫からジュースの缶を2本取り出して戻ってきた彼は、私の

頭にそれをのせた。

「うわ冷たっ！ 差し入れは嬉しいけど、それは反則だよ！」

「首とどっちにしようか迷ったんだけどな」

してやったり、そんな表情の彼から缶をもぎ取り、中身で喉を潤す。

桃味の炭酸が、口の中で広がって……。

「……ん？ これって……アルコール入ってる？」

「え？ あ……」

私と同じタイミングで口にした新谷氏は、本当に今気がついたらしく……間の抜けた表情で缶を見つめる。

「……まあ、間違えちゃうよね。ジュースとさほど変わらないラベルだし」

アルコール度もほとんどないようなものだし、特に自分が弱いという認識はなかったので、私は彼に「このままもらうね」と断ってから、再びパソコンに向き直る。

けど、あんまりゲームにばかり興じるのも彼に悪いと思って、区切りもいいし、一旦そこでセーブしてから、パソコンの電源を落とした。

これから……少し、新谷氏と話がしたいな。そう思ったから。

「新谷氏、あのね、今日はこれから……」

かたん、と、彼がテーブルに空き缶を置いた。その軽い音から中身がないことがうかがえる。

そんなにのどが渴いていたのだろうか。読書中とはいえ、もう少しこまめに水分補給すればいいのになあ……。

「――都」

私がそんな言葉を紡ぐよりも早く。

椅子に座ったままの私を、いきなり下の名前で呼んだ彼が唐突に抱きかかえた。

思考が停止する。

初めて名前を呼ばれたことと重なって頭が一瞬でフリーズ、現状処理能力が大幅に欠如。そんな放心の私を悠々と抱えた彼は、人形状態の沢城都をベッドの上に座らせる。

そして、私が声をあげる前に口を塞ぎ、そのまま体重をかけて押し倒した。

……あ。

………ああ!?

我に返っても既に遅い。どう考えても接近戦は反則。私が純粋な力で君に勝てるわけがないじゃない!

「ちょっ……新谷氏!？」

密着している彼の体が熱を帯びているのは……お酒を飲んだからに決まってる。ジュースと変わらない飲み物だけど、飲んだ量だって少ないけど、絶対そうだ。そうに決まってる。それでお願いします。

だって、そうでなきゃ、ここまで積極的に攻めてくるわけがないよ……多分。

何だこのフラグの回収イベントは。っていうかリアルなキスだって実際初めてなんですけど私。

息苦しい、頭まで酸素が回らず、ぼんやりしてきた。

「新谷氏っ……!」

彼はあたしの話を聞かず、一旦離れた唇が再び重なるまで、3秒。少し角度を変えて、さっきよりも、深く。

ゲームをしているときは大袈裟な、かつ卑猥な音だと思ってたけ

ど……案外、そんなこと、ないのかもしれないな。

「……ああもうっ!!」

そして気がつけば、私も彼を抱きしめているという現実。ああもう、これは全て（お酒と）雰囲気のせい。多分好き同士、若さゆえの勢いだと思って、今日だけは何も考えないことにしよう。

ねえ、新谷氏、私はそう思うんだけど。

キミは、どう思う？

——そして、

主人公属性は辛いよ（後書き）

若い勢いって実は萌えポイントだと思うんだ……そんな私はダメ人間ですが、何か？

イベント消化、の、その後（前書き）

ちよつと濃い目……というか、リアルな恋愛の描写が続いております。

R-18ではないと思いますが、不快な方はご遠慮ください。

イベント消化、の、その後

……疲れたという言葉が適切なのかどうかは分からない。
別に働いたわけでもないし、勉強したわけでもない。

ただ、体はだるい。何だか頭もフラフラするし……痛い。
色々痛い。

どこが痛いとか具体的な表現は避けるけど、鈍い痛みと感じたことのない妙な違和感は、脳内でどう処理すればいいのだろうか。

意識が何となく覚醒した私は、ぼんやりと瞼を開いて……天井を、見上げた。

カーテンの隙間から差し込む光が、夜じゃないことを――夜が明けたことを鮮明に伝えてくれる。

掛け布団の隙間から肌寒さを感じ、思わず一度身震いした。

そして、自覚する。

ココは私の部屋じゃなくて。

昨日のことは……よく分からないやり取りやその他諸々を含め、私に都合のいい夢じゃなくて。

そっと、左横に視線を移す。

そこにいるのは、安定した寝息で夢の中にいる彼の姿。相変わらず端整すぎる外見に、普段見慣れない眼鏡ナシの状態だから……ただでさえ耐性のない私は心臓が大きく波打ってしまう。

でも……昨日のあの時に比べたら、まだマシか。

私は思わず失笑して……色々思い出した途端に赤面した。

彼が私の名前を呼んだ瞬間、全身が痺れて動けなくなったような感覚に襲われたんだ。

見つめられると動けなくなって、視線をそらせなくなる。

結局のところ……彼の言葉に導かれるままに、私は服を脱いだりしちゃって、それで……。

……あああ。

知識だけしか知らなかった、知識だけが先行していた世界が、急に現実として私の前に姿を現す。そう、それはまさしく突然に最初からクライマックスって言うか、その……。

……認めるしかない。私を抱き枕に安らかな顔の彼に抱かれたことも、ぶっちゃけ初めて捧げちゃったとかいうことも、その他諸々、全て現実なのだ。

普通の女の子なら、もっと取り乱すような場面かもしれない。だけど、

「……疲れた」

どうしてだろう、色々乙女として恥らうべきかもしれないけど、どっと疲れが。

うん、改めてゲームのヒロインは凄いよ……私、あんなに要求されても無理だもん。絶対無理。従順に従うなんてありえない。一晩中？ 3回？ 無理、絶対無理っていうか不可能。どれだけ体力とかその他かが備わっていれば可能なのよそんなことっ！ シナリオライター出て来い！！ 絶対男でしょう！？

実体験してみても強く思ったのはそういうことだった。

……私らしい、なあ？

私の右上、枕元に彼の携帯電話がある。時間を確認すると午前8時過ぎ、どーりで小腹がすいてるわけだ。

っていうか……昨日、夕食は何を食べたっけ？ 何か食べたんだっけ？

うう、昨日は特に色々としょっきンクな体験ばかりが集中したら、日常の些細なことが思い出せないっ！！

でも……今日からはまた、日常が始まる。

だけど、多分……昨日までとは少し違う、そんな日常が。

抜け出せないで諦めて二度寝することにした私は……優しい笑顔で眠っている彼の顔に和んでから、軽く、目を閉じる。

昨日、至近距離で真っ直ぐ見つめられたときの新谷氏は……もうしばらく、忘れられそうにない。

うん、ここまで来たら認めよう。

私は彼のこと、いつの間にか好きになっていたんだ。

まあ、私は自分がフラグを立てたつもりはなかったんだけど……抱きしめられて、キスされて……笑ってくれて。

嫌じゃない、むしろ嬉しいと思っている私が、確かにいたから。彼が本気じゃない女性に対してこんなことをしないのは分かっているつもりだった。だから……だからこそ、このまま終わらせたくない。

今は……彼の過去に何があったのか、多分、話をしてはくれないけど、

「いつか、名前で呼ばせてくれる……かな」

まずは、近い将来……「新谷氏」じゃなくて、「薫」って呼べる関係になりたい。

そして、その時の彼は……昨日以上に優しく、私の名前を呼んで欲しい。

呆れ顔でもいい、苦笑でもいいから、いつか……太陽が高い時間でも呼んでね、「都」って。

ただ、今はとりあえず、

「……冷蔵庫の中身をチェックして、アルコールは処分しなくちゃなあ……」

次に起きてからやることを頭の中にインプットしてから、そつと、もう少しだけ、彼に近づいた。

互いの笑顔を死守するために、彼には今後、むやみに酒を与えないほうがいい、と……心の中で固く誓いながら。

イベント消化、の、その後（後書き）

お母さんは都をそんな女の子に育てた覚えはありません！！

……書いたの私ですけど。

ちなみに、二人は勿論18歳以上です。

（またやってきました）彼の独白

俺が思い出すのは、まだ、出会って間もない頃のエピソード。

「あー……終わったあ」

3時間ほどパソコンの前に張り付いていた彼女が、イヤホンを外してぼつりと呟いた。

体をほぐすように椅子の上で背伸びをして肩をまわし、手元にあるペットボトルから水分補給。そして一度ため息。

「沢城さん？」

「あ、実はね、先ほどめでたくゲームをフルコンプしましたっ」

俺が話しかけると、彼女はパソコン画面を指差してにやりと笑った。

「本当にありがとね、新谷君。こうやって入り浸ってプレイできたから、ゲームの世界に没頭できたよー」

彼女曰く、寮でゲームをすると誰が尋ねてくるか分からないので、あまり集中できないらしい。そういう意味では彼女にとってこの環境ほどゲームプレイに適した空間はないのではないだろうか。

何度も「ありがとう」を繰り返す彼女に、俺は慌てて言葉を紡いだ。

「いや、俺こそありがとう。おかげで読みたかったシリーズを買わずに読めたんだから」

それは、彼女からの提案。俺の部屋にあるパソコンを貸す代わりに、自身のネットワークから入手したBL本を貸す——その交換条件に俺は何の躊躇いもなく頷いた。これは俺にとっても嬉しい誤算だから、彼女がゲームをクリアしたことを聞いて、この関係が崩れてしまうかもしれないことが……少し、残念でもある。

俺がそんなことを考えていると、彼女が何やら上目遣いで俺を見上げ、

「あ、あのね……新谷君……こ、このパソコンなんだけど、これからもちよくちよく使わせてもらったりしちゃ、ダメ？」

「え？ そりゃあ別に構わないけど……」

ここで断る理由はない。首を縦に振った瞬間、「やったあ！」と笑顔の彼女が俺を見つめ、

「じゃあ、これからも喜んでBL本を横流しさせていただきますっ！」

びしっと額の前に手をかざし、敬礼もどき。俺もつられて背筋を正しつつ、不意に、とある友人が脳裏をかすめた。

彼女は自分の友達からBL本を借りて俺に横流ししている。そういうルートには、俺にも若干の心当たりがあったから。

「……ねえ、沢城さん、次にやるゲームって決まってるの？」

「へ？ うーん……バイト代と相談かなあ。色々やってみたいソフトはあるんだけどね」

パソコンゲームの相場は8千円前後。彼女が寮生活であることも考慮して、あまり大人買い出来るものでもないだろう。

ソフト名を指折り数えつつ優先順位を考えている彼女に、俺はある提案を試みることにした。

「少し前のソフトであれば、貸せるかもしれないよ」

「……へ？」

刹那、彼女の目が丸くなる。

「どういうこと？」

「いや、俺の友達もギャルゲーが好きだから。奴が持ってるソフトでよければ、俺が借りて沢城さんに渡せるな、と、思った……」

「本当!？」

言葉を最後まで聞かず、彼女はがしっと俺の両手を握って、

「それは是非! ぜひっ! 全力でお願いしたいんですけどっ!」

「あ、ああ……どこまで希望に添えるか分からないけど……」

「ううんっ! そんな申し出をしてくれるだけでありがたいよ!」
そのままぶんぶん大きく上下にふる。少し腕が痛い。

でも、こんなに喜んでもらえるとは思っていなかったので、彼女の笑顔につられて俺も笑っていた。

そんな折、彼女が唐突にこんなことを言う。

「ねえ、新谷君。今までどんなあだ名で呼ばれてた？」

「へ？」

脈絡のない質問に、今度は俺が目を丸くした。

「あ、いや……新谷君って呼び方も何となく形式的でつまんないなあと思って」

「あだ名……」

少しだけ考えてみる。今まであだ名で呼ばれたことは……。

「……特にないかな」

特になかった。

事実をそのまま正直に告げる。「まあ……そんな気はしてた」と、しばし考えた彼女は、

「新谷、新谷……ミルフィーユ新谷、略してミル新、とか？」

「じゃあ俺はローゼン沢城って呼ぶぞ？」

「……ゴメンなさい自重します」

声優ネタで切り返された彼女が口ごもるが、さすがにミルフィーユは恥ずかしいし、知らない人に説明するのも面倒なので、反論しておかないと。

脳内で他のネタを検索しているのか、再び思案する沢城さん。

「勝手なイメージだけど、私の中では「君」っていうより「氏」って感じなのよね。ジェントルマンというか……そんな感じの」

「はあ……」

「だから、その……うん、私はこれから新谷氏って呼ぶ！」
しんたにし。

下から読んでも……いや、違うな。むしろ、

「新谷氏？ 言いにくくない？」

「いいの！ こういうのはファーストインプレッションが大事なん

だから」

彼女の中では話が繋がっているらしい。まあ、最初のものに比べれば嫌な呼び方でもないので「まあいっか」と認めつつ、

「俺はどうすればいい？」

「んー……まあ適当に。でも、名字なら呼び捨てがいいかな。敬称略ってことで」

敬称略、それは俺の中で少しだけ、勇気が必要な呼び方だけど。

「――じゃあ、沢城」

「ん。じゃあ私は新谷氏って呼ぶね」

あの時の俺は、すんなり彼女を呼ぶことが出来た。

それはきつと、僅かな時間でも彼女の一面をある意味深く知ることが出来た結果だと思っていたけど、もしかしたら、この時からそれ以外の理由があったのかもしれない。

「……なあ薫、本当に大丈夫なんだよな、その女の子」

その日の夜、親友である大樹に「美少女ゲームを貸して欲しい」と頼み、その経緯を簡単に説明すると……電話の向こうにいる親友が、少し訝しげな声で問いかける。

沢城がやってみたい美少女ゲームがあると聞き、真っ先に浮かんだのは大樹だった。案の定ソフト名を告げると「まあ、俺なら持つてるけど……」という返答。俺にはどんなゲームなのか分からないけど、大樹が持つてるってことは、それなりに有名で面白いソフトなのかもしれない。聞いても分からないから聞かないけど。

ただ、

「ええっと……沢城さん、だっけ？　まあ、薫の前でそこまでぶっちゃけて、このソフト名を列挙する女の子が、最初から妙な下心を持っているとは考えたくないけど……杏奈ちゃんのこともあるし、気をつけろよ？」

「そう、だな……」

奴からの忠告に、思い出したいくない記憶が溢れようとする。

まだ、そう遠くない過去。あの時、俺の前から離れていった彼女――大好きだった杏奈の泣き顔が、俺の知っている最後の彼女で……。

「薫？」

大樹からの声に我に返り、「じゃあ大樹、悪いけどさっき言ったタイトルを頼む」と電話を切った。

部屋の中で一人、ため息をつく。

今日はバイトもなく、沢城もない。久しぶりに一人だけの空間で、彼女に借りた小説でも読もうかとベッドに転がった。

「もう、無理だよ……私、このまま薫と一緒にいても疲れるだけなの」

頭の中でフラッシュバックするのは、最後に杏奈から言われた言葉。

「どうして私ばかり我慢しなくちゃいけないの！？ 薫は私のこと、もうどうでもいいって思ってるんでしょう！？ だから……あの噂も本当なんでしょう！？ 薫が私のことどう思ってるのか……薫がどうしたいのか、全然分からないよ！」

違う、そうじゃない。何度も否定した。だけど……俺の言葉はもう、彼女には届かない。

どれだけ叫んでも、彼女は俺に背を向けて歩き始める。

二度と、振り向いて笑ってはくれない。

俺の心にはまだ、彼女のことが色濃く残っているけど。

「いつか……話さなきゃな」

隣で眠っている沢城を見つめながら、そんなことを、思っていた。

(またやってきました) 彼の独白 (後書き)

ミルフィーユで来るならミントだろう、と、思われる方……あなた
が正しい！ (ローゼンの方が面白いかな、と、思ったんです)

女同士で隠す気のない話

「あははっ！ 普段は受けなのに、アルコール入ったら鬼畜キャラ！？ 都、それってかなり貴重よ、最高じゃない！ その彼、やっぱり一度あたしに会わせなさいってば」

昼間のカフェでそんなこと大声で言わないでください綾美さん。ちなみに私、鬼畜とまで言ってませんから。

授業の合間をぬって集合した私たちは、おなじみの場所に向かってい合わせに座り、相変わらずのトークを繰り広げているのである。

まあ、話は私と新谷氏のことばかりなのだが……彼から言付かった綾美本（と、命名しておこう）の感想を彼女に告げると、「そう、そうなのよ！ 最近はホストやセレブがもてはやされてるけど……でも、あたしは社長と秘書がいいの！」と、何度も何度も頷きながら力説する。

やめい。アンタ、恥じらいがなさすぎるんちゃ。

私がメニューで彼女の頭を叩き、ようやく沈黙。しかし、にゅつと鞆から取り出した次の本をちゃっかり私に手渡すのは忘れない。

「でも、都に彼氏が出来るとはねえ」

彼女が昼食のパスタをすすりながら、よーやく女子大生らしい（まあ、実際綾美は専門学生だから、女子大生じゃないんだけど、細かいことは気にしないことにしてね）言葉を呟き、私を見つめた。

彼女の綺麗な瞳にストレートで見つめられ、思わずドキっとする。

「な、何よいきなり。人をまじまじと見つめたりして……」

「だって、今まで全然そういう気配がなかったと思えば、いきなりパーフェクトスペックの彼氏を一本釣りでしょう？ まあ、都は性格いいし、着やせするタイプだから……彼、えっと、新谷君だっけ？ そりゃーもう嬉しかったでしょうねえ」

着やせするタイプ、それ、この間も言われたけど……。

「嬉しかったって……ど、どうしてそうなるかな？」

「じゃあ聞くけど。沢城都、上からスリーサイズ言ってみなさい？」
え？　っていうかコレってセクハラ発言じゃないんですか先生！

露骨な質問に、私はふいと顔をそらして無視。トイレに行こう（逃げよう）と思って立ち上がったのだが、

「うーん……見た感じ、上から88・62・89ってところかしら？　正直、胸があたしより大きいのは悔しいのよね」

「いっ！？」

リアルセクハラ発言です！

っていうか……さすが親友というべきか。そりゃあ確かに、互いの家に泊まったことはあるけど、ココまでの確に言い当てられると、コメントに困るというか……少し誤差はあるけど、その誤差が少ししかないことの方が驚きで。

私は彼女に反論できないまま、逃げるように移動する。

あの時のことを思い出して高潮した頬を隠すように、少し、うつむいた体勢で。

それから、私たちは場所を移動。互いに欲しい本やCDがあったので、足は自然と「いつもの場所」へ向かっていた。

いつもの場所、それは……具体的な店名出していいのかな……ええっと、私たちが住んでいる町にあるのは、ポイントカードが青いあのお店。アキバも乙女ロードの首都圏のお話だ。某虎さんや緑の野菜さんの店はないので、この町で同じような趣味の人間が集まる場所はこのお店になってしまう。

うん……駅ビルの中にある、ってことを除けば、最高の空間なんだけど。（入るとき、どうしても周囲を気にして挙動不審になってしまう私はまだまだ小心者）

私と綾美は読むジャンルが違うので、店に入った瞬間無言で別れる。本日の私は新刊コーナーのライトノベルを適当に物色し、気になった本の後書きだけ読みながら（本文より後書きが好きなのさ）、

面白い出会いを期待する。

特に今日は自分好みの作品が見当たらなかったので……フラフラと店内を徘徊。

途中、BL小説がずらりと並ぶ棚の前で、思わず足を止めてしまう自分がいる。

棚の前に並べられた本の表紙は……うーん、コメントし難いというか、表紙からキラキラしているというか、何というか。

その中のいくつかを手に取り、勇気を出して裏に書かれたあらすじを読んでみる。

なにになに……

『祖父の命令で屋敷に戻った主人公を冷たく迎える使用人。主人公はそんな彼の挑発的な誘いにのってしまい……』

『編集者の主人公は、BL漫画家（♂）の担当を命じられる、彼からのアプローチにタジタジの主人公。そこへアシスタントも加わってきて……』

『一般人である主人公の恋人はアラブ石油王の孫息子で……美形のホストを助けたのはヤクザの兄ちゃん……』

……ああ。

そうだよね、こういう世界なんだ。

美しいよ、色々美しいんだけど……眩しすぎて、今の私には無理です。

手に取った本をそっと元の場所に戻し、人知れずため息。

「都も読んでみればいいのにー」

いつの間にか私の後ろにいた綾美が、グッズや漫画の画材を大量に入れたカゴを片手に呟く。

私は肩越しに振り向きながら、苦笑いで返答した。

「うーん……やっぱ、私には無理だよ。美少女が出てくるノーマルが一番」

逃げるようにその売り場から離れる私の後ろから、彼女は物騒な言葉を呟いた。

「都をコッチに引き込むためには、その新谷君に協力してもらえないわね……」

うん、絶対会わせられない。

私は改めて誓ったのだった。

事件が起こったのは、その後。私たちがそれぞれに買い物をして、その店を出た瞬間である。

「――あつ！」

近くで誰かが息をのんで言葉を失ったような、そんな声が聞こえて。

何かあったのかと思って周囲を見渡してみると……向かい側にある洋服屋から出てきた女の子が、私たち――というよりも私を、その見開いた目で見つめていたのだ。

視線が、交錯する。それはほんの一瞬。

長い髪の毛に、可愛らしいパステルピンクのワンピースが似合う彼女は……私を思いっきり差別的な目で見つめると、スタスタとどこかへ歩いて行ってしまふ。

一度も振り返らず、まるで汚いものから逃げるようにスタスタと。正直私は、誰だか分からなかった。でも、すぐに思い当たる人物が一人。

あの美少女は、そう簡単に忘れられない。ファーストインパクトも強かったから尚更。

「どしたの都。知り合い？」

「んー……ちょっと、ね」

会話を交わしたわけじゃないから確信できないけど……あの態度、完全に軽蔑されたというか、何というか。

きっと、こういう趣味を持っているタイプは好きじゃないんだろうな……さっきの彼女——新谷氏の後輩である林檎ちゃんが私に向けた視線を思い出し、再度、でも違う意味でため息をついてしまう自分がいた。

女同士で隠す気のない話（後書き）

作中に出てきたBL本のあらすじは、私の勝手な妄想です。イメージです。

あいかぎ（前書き）

初っ端から不健全だと思われるかもしれない描写があります。
BLダメな方は何とかすっ飛ばしてください。

あいかぎ

“『ほら、どうしたんだよ、さっきまでの威勢は』

『……い、嫌、こんなの……俺』

『何言ってるんだよ。こんなに感じてくるくせに……』（卑猥な音）

『――あっ！　そ、そこ、は……違う、違うっ！！』（ギシギシ

と何かがきしむ音）

『何が違うんだ？　はっきり言ってもらわないと分からねえな』

『俺は……アンタの言いなりになんか……ならない……っ！』（

荒い息遣い）

『そういう強がりには、もっと余裕があるときに言うんだなっ！』

（大きな物音）

『はっ……ふっ、うあっ……ああっ！！』”

……………。

空いた口がふさがらないというか、何と言うか。

私はスピーカーから聞こえてきた音声に、途方に暮れるしかなかった。

いや、原因を作ったのは私なんだけどね。

綾美からBLのドラマCDを借りた私は、興味本位で「私も一緒に聞いていい？」と、ヘッドフォンを装着していた彼に提案したのだ。

そう、本当に興味本位だった。ギャルゲーもドラマCDになることはあるけど……その場合、シナリオからエロ要素を排除した内容だったり、外伝的な内容 だったり……とにかく、露骨に音声で「そういうシーン」が入っている場面は皆無である。いくらBLの

CDとはいえ、そこまで濃い内容でもないだろう、なんて……そう思った私が浅はかでしたね、ハイ。

一応、新谷氏も忠告してくれたのだ。「沢城には刺激が強すぎるからやめたほうがいいと思う」、と。

そんな彼の忠告を豪快に無視して、挑戦してみたBLCD。

やっぱり本からにすればよかった、かなあ？ 後悔先に立たずとは、よく言ったものである。

一連のシーンが落ち着いたところで、彼が苦笑で一時停止のボタンを押して、

「どうする？」

これ以上聞くのか、否か。

私は迷わず、逃げることを選択した。

……嗚呼、今日は衝撃的だった……。

彼の部屋から帰る道中、先ほどのドラマCDが頭の中で何度もフレインしていく。

最初は普通の学園モノのはずだったのだ。転入生が生徒会長に呼び出された辺りからおかしくなっていくって、それで……。

……ああ。演じているのも普通にメジャーな声優さんだもんなあ。あのアニメとかマトモに見れなくなるかもしれないじゃない。

新谷氏、やっぱりBLが好きなんだなあ、と、改めて思う。

だから、ふと、バカらしいことだとは思っているけれども。

私と一緒にいて楽しいのかどうか、不安になることも、ある。

趣味が合う綾美みたいなタイプの方がいいんじゃないか、なんて……らしくないことを考えては、一人、ため息をつくのだった。

「……バカみたい」

愛されてないと思っているわけじゃない。そういえば互いに明確な告白があったわけではないけれど、前よりずっと大切にされているし……あの事件からもうすぐ1ヶ月、泊まったのはあの一度だけじゃない。むしろ最近是多ければ週の半分は彼の部屋に泊まってい

た。まあ、ゲームに興じる割合が高いけれど、最終的には……。

「……」

一人で赤面。

付き合う、という関係が互いの告白によって成立するのであれば、私と新谷氏はまだ「付き合っている」とは言えないのかもしれない。だけど、少なくとも私は、彼を下の名前で呼べるようになるまで、どこまで近づいていいのか測りかねているのも事実なのだ。

「好きです」——言葉にして伝えてしまったら、何かが壊れてしまう気がした。

彼の心には、まだ、笑えない過去が突き刺さっている。そんな不安を確かめられないまま、彼に抱きしめられると安心する自分が、現状維持を訴え続けて……私は、それを選んでいるから。

まあ、そんな不安はあるにしても、それさえ考えなければ前よりもずつと関係は近づいたと思っているし、私ももつと、彼に近づきたいと思っているから。

……こう思うってことは、私も大人の階段を一段登ってしまったってことにしていかな。そういうことにしようつと。

と、

「……？」

自分を事実で納得させようとした瞬間、誰かに見られている気がして、立ち止まる。

大学周辺であるこの周辺地域は、当然ながら遠方出身の学生が多く暮らしている。学生向け一人暮らし用のマンションが乱立し、コンビニがスーパールの代わりになり、当然、道を歩いていれば大学での知り合いに会うことだって日常茶飯事だ。私が住んでいる学生寮は大学の裏手にあるので、サークル活動をしている友達や、寮で出会った友人などと出会うことは、いつものことなのに。

最初のうちは気をつけていたとはいえ、新谷氏の部屋に入り浸っていることが周囲にバレるのは時間の問題だと思っていた。そして特別に気をつけなくなった今ではすっかり私も噂の的らしいのだが

……今までにないタイプの視線を感じることが、最近、ある。

友達にも冷やかされ、忠告された。「彼の人気は一部で半端じゃないから気をつけろ」って……何が半端じゃなくてどう気をつければいいのだろう。もっと具体的に教えてくれればいいのに。

まあ、私も陰口くらいで泣き出すような、弱い肝っ玉を持っているわけではない。ただ……こういうのはあまり好きじゃない。だから、自分から積極的に関わろうなんて思っていないし、周囲を気にして萎縮する必要もないので、私は私のまま、いつも通り、寮までの道を急ぐ。

途中ですれ違った髪の毛の長い少女を、チラリと横目で捕らえながら。

「まだ後遺症が残ってるのか？」

翌日、特に理由はないけど彼の部屋へ転がり込んだ私に、出迎えてくれた新谷氏が苦笑した。

勿論、本人がいることは確認済みである。ただ、今日はお互いバイトなので、あまり長くは一緒にいられないけれど。

今日はパソコン前じゃなくて、彼の隣に座る。珍しいことをしてみようと思った理由は至って単純明快だ。

「……分かる？」

「何となく、だけど。沢城が疲れてる気がしたから」

実際、疲れていた。今日も誰かに見られている気がしたから。

自意識過剰かもしれない。でも、それならそれでいい。何事もなければ、今の私達に実害がなければ、それでいいんだから。

「でも、あれは衝撃的だってば。新谷氏、よく平然としていられたよね」

「まあ……よくあるシチュエーションだったからな。展開が読めたから、後半は半分もうどうでもいいやって気分だったし」

さらりと言ったのける彼に、自分の姿を重ねてしまった。

ギャルゲーをしているときの私も、さっきの彼と同じような視点で考察している。客観的になってしまいう傾向が強いから。

そんな私でも、BLを客観的に見る事が出来るようになるまでには、まだまだ修行が必要らしい。

「……やっぱ、私にはまだBL無理。綾美や新谷氏みたいに楽しめないもん……」

「いきなり楽しめたら、それはそれで凄い才能だな」

がくりと肩を落とした私の頭に、彼はぽんと手をのせた。その手が少し熱い気がして、首をかしげながら見上げる。

「新谷氏……手、熱くない？」

「そうか？ まあ……少し緊張してるし」

緊張？ 何を今更？

目で訴えた質問に答えるように、新谷氏は少し間を置いてから、「いや、その……昼間にこうやって過ごしたことから、あんまりないよなあ、と……」

スイマセンね、昼間はゲームに興じることに生きがいを感じてますから。

……という自虐突っ込みは、心の中で。声に出すのは申し訳なくて(だって、一目散にパソコンの前に座っているのは間違いなく私だし)、謝罪の代わりに、彼にもたれかかってみた。

「沢城？」

「……たまにはいいでしょ？ バイト前のエネルギー補充よ」

そういう、「すっごく意外です」な声で名前呼ばなくていいよ。やってる私が恥ずかしくなるじゃない。

無言の私に、彼もしばらく黙ったままだったが……不意に、ズボンのポケットをゴソゴソとまさぐり、

「渡したいものがあるんだけど」

「へ？」

唐突に、私の前の前に銀色の鍵をさらす。

特に飾り気のない、ごく普通の鍵である。どこの部屋が開けられるのかは知らないけど。

「鍵？」

「そ。この部屋の合鍵なんだけど、沢城に預けたほうがいいかと思
って」

……え？

………ええ！？

一瞬呼吸を忘れた、それくらいの衝撃。

だ、だって……合鍵！？ 同名のゲームがあつたような気がする
けど今は関係ないか。

それを私に預ける！？ まるで彼女みたいじゃないか！？

「私、に？」

半信半疑で確認すると、彼が笑顔で首肯する。

眼前でゆれる鍵を、私は恐る恐る両手で受け取った。

「でも……いいの？」

「俺がいるときじゃないとパソコンを使えないんじゃ、沢城のスト
レスがたまらんんじゃないかって思ってたさ」

何だよその理由。

さらりと言い放った彼の言葉に、思わずムツとしてしまう私がい
る。

そりゃあ……そりゃあ確かに、タイミング悪いところでセーブし
なくちゃならなくて、その続きが4日後にしか出来なかった時は……
色んな意味で辛かったけど。

そのストレスから解放されるのは、個人的に嬉しい。

嬉しいよ？

でも、

「——っていうのは建前で」

私の心中を察した彼が、にやりとした表情で見つめていた。

……私の反応予想して、絶対わざと言ったんだな！

悔しいので、その後は聞いてあげないフリをする。ただ……私に

嬉しい言葉であることには変わりなかったので、頬が思いつきり緩んでしまったけど。

そうこうしているうちにタイムリミットになった私は、彼の部屋から出た後も……地に足がつかないというか、ぼんやりしているというか。

だって、合鍵だよ？ 確かそういうタイトルのギャルゲーもあったと思うけど……とにかく合鍵なんですよ奥さん。

彼の部屋にいつでもいいよって、そういうことなんでしょう？ 例えば今日も、彼の帰ってくる時間をわざわざメールで聞かなくても――

「――幸せそう、ですね」

私を現実に戻したのは、忘れられないロリボイスだった。視線を向けたその先、コンビニの入り口にいた彼女――林檎ちゃんが、冷たい表情で近づいてくる。

今日も白いカーディガンに膝丈のフレアスカート、という、女の子らしいスタイル。パーカーにジーンズという私とは正反対である。まあ、彼女と張り合おうにも……住んでいる世界も、見ている景色も違うから無理なんだけど。

林檎ちゃんは、無修正で可愛い顔をして「不機嫌」という感情でコーティングし、私を敵だと認識している様子。

思わず私も、警戒してしまう。

「ええっと……宮崎さん、だっけ。何か用？ これからバイトだから、手短にお願いしたんだけど」

「言いたいことは一言です。先輩に変な影響を与えないでください」可愛い声で、可愛い顔で、彼女は随分ヒドイことを言うものだ。

変な影響？ 私、彼に？

……いや、否定できませんが。でも、もう手遅れだとも思います
が。

色々考える私とは対照的に、彼女は真っ直ぐ私を見据えて、強く
続けた。

「だって貴女……漫画とかゲームとか、そういうのが好きなんでし
よう？ オタクって、自分の世界に相手を巻きこもうとするんです。
先輩は優しいから、貴女を否定しないだろうし……貴女のせいで先
輩がまたそっちの世界に染まっちゃうなんて、絶対ダメ」

だから、心配しなくても彼は私と同類だよ？

口に出せない歯がゆさを感じながら、ふと、疑問に感じることに
ある。

「何が好きなのか、それは私や彼の自由でしょう？ 私の影響だろ
うが何だろうが……宮崎さんが否定することはないんじゃない？」

「あんなカッコよくて優しい先輩がオタクになっちゃうなんて絶対
ダメです。イメージダウンもいいところだわ」

私を睨んだまま彼女は断言し、ため息をついた。

「オタクなんて……考えてることはアニメのことばかりで気持ち
悪いし、そもそも「そういう世界」に本気になってるってところも
イタいし。先輩はそんな人じゃない。貴女が近くにいなければ、そ
んな人にはならない」

それに対して色々言いたいことはある。だけど、とりあえず今、
私の個人的な意見はどうでもよくて。

今の言葉で確信したことが、一つ。

「……要するに。宮崎さんも彼の外見が良くて性格も趣味思考も「
普通」なら、それでいいってことなんだね」

ぼつりと呟いた独白は、きちんと彼女まで届かなかっただろう。
一瞬訝しむように私を見つめた彼女だが、私が言い直さないことを
悟り、再度、ため息。

「先輩は普通の人だし、先輩がそんな人と付き合うわけがないんで
す。貴女の影響が強くなる前に、先輩から離れてください」

これ以上、彼女と話すことは何もない。それが、私の下した結論。無言で彼女に背を向けて、寮へ急ぐことにした。彼女が何か言いかけたけれど、それにいちいち反論するほど律儀な性格ではない。

ねえ、新谷氏。

君はいつも……こんな思いをしてきたのかな。

外見だけでしか判断されない。外見のイメージから外れることを周囲が許してくれない、そんな環境の中で生きてきたの？

だとすれば……息苦しいね。心からそう思う。

バイトが終わったら真っ先に逢いに行こう。そして、今日は私から……抱きしめてみよう。

そんなことを考えながら、ポケットの中で揺れる鍵を……握りしめた。

ゲームをやりたくてバイトが早く終われと思うことはあったけど、彼に会いたいから早く終われと思うことは、案外初めてかもしれない。

少し考えればヒドイな。そんな自分に怒りさえ感じてしまう。だけど、今日からは……これからは多分、こう思うことの方が多くなっていく……はず、だから。多分。

夜道を自転車でかっ飛ばし、そのまま、彼のマンションに直行。ココはオートロックじゃないので、エレベーターで目的地を目指すのみ。

程なくして、扉の前に到着。まだ、時間的に彼は帰ってきてないはずだから、鍵をさして扉を開けようと……。

鍵穴に鍵を突っ込んだ瞬間、私は隙間から悟った。

鍵が、開いているのだ。

どうして？ 彼は今日バイトだったはずだ。本人の口から聞いたのだから間違いない。

いきなり休みになったのだろうか。その可能性は否定できない。だけど……室内が暗い。だから、誰もいないと思ったのに。

嫌な想像ばかりがグルグル回る。バイト前に出会った林檎ちゃんが、あのままこの部屋に押しかけてきて、押しに弱い新谷氏は断りきれずにそのまま――

そんなことない。

そんなこと、ない。

最悪の未来を打ち消したかった私は、一瞬迷ったけれど、思い切ってドアを開いた。

廊下の明かりが玄関に差し込む。その光が、暗闇に隠された室内を、少しだけ映し出して――

「新谷氏!？」

現状を目の当たりにした私は、思わず彼の名前を叫んでいた。

あいかぎ（後書き）

冒頭のCDは、霧原のイメージと願望と偏見です。こんな感じで正しいですか？ 経験者からの助言求む！（自分では怖くて聞けないらしい）

君に届け

先日みたく、自分でも気がつかないうちにフラグは立ててしまうものだと思っていたけど。

「……具合悪いなら、どうして私がいるときに風邪薬を買って来いって頼まないかなあ？」

私、いつの間に看病フラグを？ まあ、今更考えたって思いだせないけど、どこかで見たことのある状況であることに違いない。

要するに、キャラクターがいきなり病に伏せる↓看病イベント（イベント！？）というある意味無茶な物語構成も、上等なのである。ただ、本気でやると思ってたませんでした、看病イベント。（だからイベントじゃないってば私）

思い切って扉を開いた私が目にしたのは、床で転がった新谷氏の無残な死骸。（死んでない）

何事かと思って名前を呼んで近づいてみる。そして、彼の体を頑張って抱きかかえた瞬間……息苦しくて切ない表情と火照った全身に、発熱を確信したのである。

とりあえず朦朧としていた彼の意識を叩き起こし、ベッドに寝かせた。応急処置として水で絞ったタオルを額にのせると、私は一旦部屋を後にする。

そして、大急ぎで寮の自室に戻り、風邪薬やひえびたシートや、必要な物資をかき集めた。彼の部屋のどこに何があるのか、正直把握していない。ないかもしれないものを探して部屋を引っ掻き回すよりも確実な方法を選ぶことにしたのだ。

ついでに、寮の事務所にも「一人暮らしの友人がぶっ倒れた」と説明し、粉末のポカリや違う種類の薬など、必要物資を提供してもらうことが出来た。

——そんなドタバタから1時間。

薬が効き始めたのか、ようやく落ち着いた彼は安定した寝息を立

てて眠っている。ちなみに私の絶叫を聞いた隣人（女性）が何事かと飛び出してきて、事情を説明して謝罪するとリングをくれたりしたんだけど……林檎、違うんだけど連想してしまうなあ。それどころじゃないのに。

いくら落ち着いたとは言えども、体温はまだ39度前半。あまり楽観視出来ないのが現状である。熱さましとゼリー状ドリンクは気力で飲んでもらったけど、そもそも、風邪だって決まったわけでもないし……状況が改善されないようであれば、救急車を呼ぶことも視野に入れなきゃいけない。

「……さわ、しろ？」

刹那、かすれた声で私を呼ぶ声が聞こえた。

私は読みかけの雑誌を広げたまま立ち上がり、枕元に寄り添う。

「気がついた？　　ったく、具合悪いなら一言言ってくれば、私がいる間に色々持ってきてあげられたんだよ？」

そう言う私をとろんとした表情で見つめる彼は、ぽつりと一言。

「俺……具合、悪かったのか？」

ここまできて無自覚ですか。

彼のびっくり発言に、私も頭が痛くなってくる。

「今の新谷氏を客観的に言えば、体温39・2度で全体的に熱いし、かと思えば顔色は良くないし。私が駆けつけなかったら朝には本当の屍になってたかもしれないんだからね」

「そう、だったのか……」

ああ神様、彼を一発殴ってもいいでしょうか？　妙なところで抜けている彼の天然発言に、駆け回った私は沸騰寸前。

でも……よく考えたら、彼の体が熱かったのは、私と一緒にいた時から。服の上から触れられた私でも、少し違和感を感じるくらいだったし。

そこで私が気がつけば、バイトは何とか理由つけてでも休んでこんなに悪化するまで放置することにもならなかったわけだし。

いや、でも違う。結局は自己申告しなかった新谷氏が一番悪いん

だから。

そうよ……鈍感すぎてここまで気がつかなかった新谷氏が、一番悪いんだから。

「……ゴメンな」

ぽつりと一言。心の中を見透かされたかと思った。はっとして思考を現実へ引き戻すと、相変わらず苦しそうな彼は……優しい表情で、私を見つめている。

「俺がもっと、自分に気をつけなくちゃいけなかったんだし……普通自分で気がつくよな、こんなに熱が高くなってるやあ……」
乾いた声で笑う彼。だけど、私は笑えない。笑えるわけがない。

……そうよ、自分で気がつきなさいよ。

何を、へらへら笑ってるのよ……私は、私はっ!!

「普通、気がつくでしょ？ 新谷氏、鈍感すぎるよ……もっと、もっと気をつけてもらわなくちゃ……」

私は、もう、あんな思いしたくないんだよ？

扉を開けて広がった暗い部屋。その片隅で倒れて動かない、好きな人の姿。

びっくりして、焦って、叫びそうになった。不安が一気に襲いかかってきて……泣きそうに、なった。

あんな、頭が真っ白になって、心臓がギュッとつかまれるような思いは、もう……!

「……私も、24時間一緒にいられるわけじゃないんだからね!」
涙がにじむ。大きな声を出した瞬間、ベッドを思いっきり叩いていた。

苛立ちは主に気がつけなかった私に対してなんだけど……でも、少しだけ、鈍感な彼への憤りも込めている。

同時に——ああ、私、本当に彼のことが好きなんだ……と、ツンデレみたいな気分が目覚めた瞬間でもあった。かもしれない。

私は涙が落ちそうな顔を見られたくなくて、立ち上がった。

いまなら我慢できる。洗面所で顔を洗って、一度気持ちをリセットして、普段どおりの自分に返ることが出来る、そう思ったから。だけど、

「ねえ、都……行かないで」

呼び止められ、次の一步が踏み出せなくなる。

どうして、こういう絶妙なタイミングで（しかも名前で）呼び止めるんだろう。素直に従ってしまう自分に失笑しながらも、このまま立ち止まっても涙しか溢れないと判断した私は、「ちょっと飲み物取ってくるよ」と、振り向かず断った。

たけど。

「――行かないで」

今度は、声がさっきよりも近くから聞こえて。

振り向いて確認する暇もなかった。

いつの間にか立ち上がった彼が、私を後ろから抱きしめたから。

「ええ!?! あ……ダメだよ! まだ安静にしてないと……!」

っていうか、いつの間に立ち上げれるまで回復したんだ!?

自分にとって都合のいい展開に今度こそ色んな感情が沸騰寸前。

熱いのは熱にうなされた彼の体じゃない。完全に赤面した私自身だ。

「新谷氏!?!」

「……薫、が、いい」

「え?」

耳元で囁いてくれた言葉に、私は目を見開く。

申し訳ないけど、信じられなかったから。

彼は、驚いて言葉を失った私を、もう一度、強く抱きしめて、

「名前、で……呼んで。都なら、俺……大丈夫だから。大丈夫になる、から……だから……」

だから、何よ。

それを伝えるために、わざわざ立ち上がったわけでもないんでしよう？

回された彼の腕をそっと握って、次の言葉を待った。

「今は何も食べたくない、から……だから、お願い。都、どこにも、いかないで……」

「そんな遠くには行かないよ、ただちょっと飲み物でも――」

「今はいらないから……都、俺も都って呼びたい。都にも名前で呼んで欲しいんだ……ダメ、かな」

途切れ途切れになる言葉。首筋にかかる彼の吐息が熱い。服用した風邪薬が効いてないじゃないかと思いながら、私は一度だけ頷いた。

「ダメなわけ……ないじゃないっ……」

キミがそう言うてくれるのを、待っていたんだから。

泣き顔を……憤りや嬉しさでこぼれた涙を見られなくてよかった、と、心から思う。

「ん、分かった。私はどこにもいかないから……でも、何か欲しいものがあつたら言ってる？ 本当に何もないの？」

「……攻め属性の白衣の先生」

「いや、それは私にも無理な注文だわ」

「……じゃあ、都でいいや」

「じゃあってどういうことよ!？」

やっぱ殴っていいですか神様。

まあ、とりあえず。

看病イベント（すっかりイベントになっちゃったよ）の醍醐味といえっ！

「すっかり汗だくなっちゃって。新陳代謝が活発なのは若い証拠よね」

ぬるま湯で絞ったタオルで、私は彼の背中をゴシゴシと。

そう、これぞ看病イベントの醍醐味……いや、個人的にはおかゆを食べさせるとか、そっちの方が楽なんですけど……とにかく醍醐味、「汗ばんだ体をタオルで拭いてあげよう！」である。

……とりあえず何も気にしないでください。冷たい目で見るのもやめてください。私としても、このまま放置して悪化させるわけにもいかないのです。

「猫背だぞっ！」

「いっ!？」

無言の時間が気まづく、状況を打破しようと思って背中をバシッと叩くと、詰まったような声が返ってきた。

……ゴメンなさい神様。結局、私、彼を殴ってしまいました。悪意はないんです、許してください。

初めて彼の背中。その大きさを、意外なイベントで体感する私である。

「とりあえず背中は終了。あ、シャツもコレに着替えてね。洗濯物が他にもあるなら、明日にでも洗濯機で……」

「……さっきのは普通に痛かったんだけど。謝罪は？」

「あ、もうこんな時間。私、今日はどうしよっか？」

「人の話は聞くように」

話題をそらすことを許してくれない彼なので、着替えのシャツを渡しながら「ゴメンなさい。でも、それくらい言い返せるなら大丈夫かな」と、言いわけを一言。

無言でシャツに腕を通した彼は、枕元にある携帯電話で現在時刻を確認し、

「もう1時過ぎか……本当に悪かったな、いきなり病人の看病なんかやらせて」

どうやら、状況は大分マシになってきているらしい。はっきり言葉をついだ彼に、少し安心してしまおう。

ただ、

「心配だから、今日はこのまま居座らせてもらうね。あ、大丈夫、

暇になったらゲームでもしてるから」

「……あのな」

何か言いたそうだ。大丈夫だよ、言わなくても分かってるから☆まあ、私としても半分冗談です。それに、最初から……彼を放っておいて部屋に戻ろうなんて、思ってたから。

「ゲームのときはヘッドホン付けるし、疲れたら適当に休むから。」

新谷氏は……」

「む。」

「……ハイハイしません。薫は、今日はもうゆつくり休んでくださいませ。でないと、私も安心して休めないから」

律儀に名前を呼ばせる彼に従いながらも、半ば強引に寝かしつけた。

素直に布団の中へもぐりこんだ彼は、額の冷却ジェルシートを取り替える私を、じいっと見上げて。

「一緒に寝るか？」

「風邪をうつされるなんて冗談じゃない。私は看病される側になんかなりませんからねっ」

「都、冷たい……」

「悲しむなっ！ それに……元気になったら、いくらでも側にいてあげるわよ」

額に新しいシートをべちっと貼り付け、正直な思いを口にする。

最初、ぽかんとした表情で私を見つめる彼だったが……「じゃあ、さっさと治さないとな」と、笑顔で呟いた。

そうだよ、さっさと完治してもらわないと。

これ以上、心配ばかりしたくないんだから。

大人しく目を閉じた彼にため息をつきながら、明日は彼が——薫が、いつものように、優しい顔で私を起こしてくれるように……願った。

……勿論、この物語には続きがあった。

しかもそれは、私が彼に風邪をうつされる、という、あまりにも
ベタな展開で進行していくのだが。

それは……とりあえず、今は関係ない、別の話である。

……だから聞かないで。

君に届け（後書き）

名字から名前に変わる瞬間がいいと思うのです。看病イベントがよく出てくるのは、美少女ゲームだけ？ それとも、霧原が多いと思
い込んでいますだけ！？

林檎ちゃんの逆襲

お互いが病に倒れた病氣週間も、何とか落ち着いて。

私と新谷氏——もとい、薫との関係は至って良好。順調すぎて笑いが止まらないくらいだ。

……こう言う嘘っぱいけど、本当に順調なんだよ？ お互い大
学やバイトや趣味に忙しく、よく考えたら二人でどこにも出かけた
りしていないんだけど。

気がつけば私は通い妻？ 最近では彼の部屋に私物（歯ブラシや
着替え、暇つぶしの雑誌などなど）を持ち込み、じわじわと侵食し
ているのです。そのうち枕とか持ち込みたいんですけどダメですか
先生。

ただ、何事にも波風は必要で。というか、薫を中心に波風が立た
ないわけもなく。

薫がバイトで能力的・接客的に重宝されているのは知っている。
だから、バイトのチーフから時給50円上げるからと（1000円く
らい上げてもらえばいいのに）懇願され、普通バイトの1.5倍く
らい働いていることも、知ってる。

彼がバイトに割く時間が多いということは、当然、彼女と接触す
る時間も多くなるということだ。

「……面白くない」

相変わらず彼の部屋にて、床に寝転がったまま某ゲーム雑誌（薫
に頼んで買ってきてもらった、年齢指定の一品☆）を読んでいた私
は、ぽつりと正直に呟いてしまった。

今日はパソコンでBLゲー（綾美提供）に興じていた薫が、何事
かという表情で振り返る。

あ、やっぱり保健医（声の担当は子○さん）から攻略してるのね。
私はツンデレの生徒会長（声の担当は○鮎さん）から落とせて忠

告したのに！

個人的には石○さんが声を担当している後輩も捨てがたいんだけど……や、やたらキャストが豪華だぞこのゲーム。しかも全員表の名前だし。

テーブルの上にあったパッケージを何となく見て、スタッフやキャストにざっと目を通しつつ、そんな感想を抱いていた私は……ある所で、思わず、目を見開いた。

「お……お姉ちゃんにほっちゃん！？」

反射的にその声優さんの愛称を口走る。サブキャラの女先生は井○喜○子さんじゃないかつ！ 加えて主人公の妹（義理ではないらしい、それぞれでヨシ！）は堀○さん！？ 妹は倫理的・年齢的な壁があるとしても、先生はどうだろう。裏ルートで攻略できないのかしら……ネットで情報収集してから、後で私もプレイしてみようかな。

って違う。そうじゃないけどでも攻略したいいつ！

「水穂先生は攻略対象外だぞ？」

目を見開いてパッケージを見つめる私の心中を察したのか、彼は苦笑いで現実を教えてくれた。

ちっ……ギャルゲーには主人公との親友（男）とのEDもある場合があるというのに！ 柔軟性が足りないよBLゲー！

——いや、だから、違う違う。思考が横道にそれるとすぐにこうなんだから。

私は自分の中にある雑念（煩惱？）を振り払って、椅子に座ってこちらを見下ろす彼を、見上げてみた。

普段とは逆のポジションに、少しでも違和感。

改めて、私がこの空間に慣れていたんだなっことを感じる。

「……薫、今日もこれからバイトだよね？」

ちなみに現在時刻は午後4時前。彼のバイトは4時半からだと言っている。

私の言わんとすることを察した薫が、椅子から降りて私の隣に座

った。

私を見つめる表情がニヤニヤしているのが、少し悔しいけど。

「でも、今日は10時に終われるはずだから。っていうか帰ってくるから」

「りょーかい」

真顔でそんなこと言われたら、変な意地を張る気も失せてしまった。

彼がバイトに忙しいから……一緒にいられないこと気にしてるのは、もっと一緒にいたいと思ってるのは、もしかして私だけかもしれないなんて、変なことを考えてしまったんだけど。

帰ってくる。そう断言した彼の言葉を信用して、私は、

「じゃあ、そのゲームの続きやってる。っていうか生徒会長と後輩、攻略していい？」

「別にいいけど……俺の前でネタばれ発言したら都がドン引きするくらい怒るぞ♪」

「……了解しました、肝に銘じておきます……」

薫の笑顔に背筋が寒くなりながらも、遂に、BLゲーに手を染めてしまったのである。

そして、その結果は。

「……ふう」

ごちそうさまでした。思わず合掌して、画面に向かって一度ぺこり。

ゲームを好きただけ堪能した私は、そのまま椅子にもたれかかって天井を見上げた。

パソコンの時計は、午後10時過ぎを示している。しかしこのBLゲー、悔りがたし。情事のシーンは基本的にすっ飛ばしたが、それでも予想以上に楽しませていただきました。

主人公（IIプレイヤー）視点で進むから……一部乙女ゲーかと勘

違いするような演出に、私も少し……いや、本当はかなり、ときめいてしまったよ。あの時間は文字通りのときめきメモリアル。ああ、乙女な感性を思い出させてくれてありがとう。

ただしこれ、個人的にキャストさんの力が大きかった。イヤホンからの破壊力が反則だったのだ。

たまに絵のバランスが揃っていないところもあったし……それに、女の子が少ないから何か物足りない。やっぱり私は美少女ゲーム畑の人間だわ。

あらかた妄想と批評をしてみて、脳内で満足してから、思考を三次元へ切り替える。

そろそろ彼が戻ってくる時間だろうか。彼はたまに、レストランでのミスオーダー料理を持って帰ってきてくれる。最近では働く彼のためだけに、料理担当の仲間がそれらを詰め合わせたお弁当を作って持たせてくれることもあるのだ。勿論、普通に美味しい。

お菓子を食べながら進めていたけど、よく考えたら何も飲んでいないしまともに食べていないし。

正直、薫のおぼれを待っていたのは事実。だけどこれ以上彼にたかるのはさすがに申し訳ないので、私はパーカーを羽織って、財布と携帯電話、鍵を握った。

今日は少し風が強く吹いていた。雲の動きが早くて、月は見えないう。まあ、この周囲はコンビニやマンション、車の通りもあるから、真っ暗闇を一人で歩くわけではないけれど。

ただ、時折木々が大きく揺らぎ、不気味な音を響かせている。ゲームの後は炭酸に限る。コンビニで調達したパスタを右手に、ワンコインで買ったジュースを左手に持ち、帰ってきた彼にどこまでゲームの話をしてやろうか、私が頭の中で色々と計画を立てていると、

「――あ」

思わず、足が止まる。

私が帰りたいマンションの入り口。そこで誰かを待つ人影に、見

覚えが、あった。

林檎ちゃん、だ。

私が出てくる時は会わなかったから、丁度行き違いになったのかもしれないけど……私の姿に気付いた彼女が、「ウザい」という声が聞こえてきそうな視線で私を見やる。

薄暗いので色までは分からないけれど、相変わらずワンピースとカーディガンがよく似合う彼女は、長い髪をなびかせながら、私に近づいてきた。

私を見据える目が、鋭い。

戦闘の意思はなかったのだが、笑顔で対応しようとする上っ面を感情が拒絶した。

「……先輩と、付き合ってるんですか？」

以前聞いたよりも低い声は、意図的に作っているのだろう。基本が高いから迫力としては薄いけれど。

「そうだ、って、言ったら、宮崎さんに不都合がある？」

以前会った時よりも私に対する敵意が格段に強いのは、はっきり感じ取れた。

同時に、疑問が一つ。

どうして——彼女は どうして、こんなに私へ突っかかるのだろうか。

そりゃあ、ずっと思っていた（であろう）彼の隣にいきなり私が現れたのだから、彼女から「この泥棒猫！」って言われてもしようがないのだけど。むしろ言っただけほしいくらいだ。そうすれば私も、もう少しスッキリするのに。

「……宮崎さんが私を嫌いなのはよく分かるけど、そんなに怖い目で見なくてもいいんじゃない？ 前にも言ったけど、私の影響が彼にあったとしても……」

「先輩の隣に、もうオタクはいらないんです！」

刹那、彼女の声が風に紛れる。

だけど、その内容は……私が全く知らない情報だった。

「何言ってるの、宮崎さん……」

「貴女は知らないと思うけど……先輩の元カノも、ゲームが大好きな人だったんです」

初聞きの事実だが、妙に納得してしまうのはどうしてだろう。まあ、薰だし。

はっはーん……林檎ちゃん、連続してヲタクに彼を取られたから躍起になってるんだな。

そう思った私は、どんな言葉を返そうかと考えていたのだが、

「その元カノは、ゲームに夢中で……先輩のことなんか二の次だった」

びくり、と、体が震えた。

「ゲームに夢中」「二の次」……一瞬、自分のことを言われた気がしたから。

だから思わず、表情が固まってしまったんだ。

そんな私を見つけた彼女が、口元に笑みを浮かべて続ける。

「ほら、やっぱり貴女もそうなんでしょう？ 結局、一番好きなのは先輩じゃなくて先輩が持っているゲーム、好きなのは自分と話が合うから。貴女が好きなのは先輩じゃない。先輩が優しいからつけこんで、利用しているだけなんでしょう？」

違う。断言できなかったのは……どうして？

「――だから、私は先輩を近づけたくなかったんだ」
不意に。

彼女がぼつりと、私に向かって吐き捨てる。

「その人と付き合ってた頃……先輩は楽しそうだったけど、少し寂しそうだった。彼女がゲームに熱中しているときの先輩が、ずっとかわいそうだって思ってた。しかも、その後にあんなことがあって、一番支えてほしい人に支えてもらえなくて……」

その言葉はそのまま、私の真ん中、一番弱いところに突き刺さる。

「ゲームやアニメが好きな人って……結局、そうなんでしょう？好きな人がいても、それよりもゲームやアニメに固執するんでしょう？」

沢城さん、貴女は……違うって言い切れますか？

私は、貴女が元カノと同じ気がする。だから、そう簡単に先輩を諦められないんです。

あんな辛そうな先輩は、もう、見たくないですから」

そのまま横を通り過ぎていく林檎ちゃんに、何も、言い返せないまま。

薫の元カノ、そして、私の知らない「あんなこと」。

何も話せない——話してくれない彼、それを知っている彼女、知らない私。

無意識のうちに……パーカーのポケットの中にある鍵を、握りしめていた。

気になることが沢山ある。

だけど、それを直接聞く勇気が持てないのは……。

「……都？」

「へっ？ あ、何？」

あれから彼の部屋でぼんやりしていると、程なくして彼がバイト

から帰って来た。

ただ、彼を見るとどうしても、聞きたくなってしまう。

元カノは、まあ……どんなゲームが好きだったのか気になるけど、私はむしろ、林檎ちゃんが言いかけた「あんなこと」の方が、気になる。

薫はいつか、私に話してくれるだろうか。私はそれを待つしかないのだろうか……。

と、いうか、私って、本当に……。

「みーやーこっ！」

「は、はいっ？」

気がつけば、少し不機嫌な表情の薫が、3センチの距離で私を覗きこんでいる。

「どうしてさっきから無視するのかな。俺と話はしたくない？」

「ち、違うよ！ ええっと……ゴメン、何の話だっけ？」

私はむしろ、君に聞きたいことが溢れているのに。

それを口に出せにままだ、私もプレイしたあのゲームの話題に。

「あのね薫、あえて言わせてもらうけど君はまだ分かってない。まずは生徒会長でしょう。眼鏡に白の詰襟よ！ これだけで襲ってくださいって広告出しながら歩いているようなものでしょう？」

「いや、甘いぞ都。俺としてはまずあの白衣に秘められた願望をだな……」

と、互いに至極真面目な表情で自己主張しているのだけど……私の中にくすぶる想いは、少しづつ、膨らんでいく。

私はこうして彼の隣にいるし、彼もそれを受け入れてくれるけど……一度も「好き」って言われたことがないんだよね。（私も本人には言ったことないけど）

考え始めると期待と不安が堂々めぐり。それが分かっているから、あえて、考えないようにしてきた。答えと直面することを避けてきたけど……どうしても、気になってしまう。

彼は、私のこと……どう、思っているんだろう。

私は本当に、新谷薫の「彼女」？

自分一人で考えても答えの出ない問題を抱えつつ、私は、ある行動を起こすことにした。

それは……まさに今私を悩ませている彼女へのちょっとした牽制というか、ぶっちゃければ嫌がらせだけ。

そんな私が抱えている想いが、薫との関係に決定的な亀裂を生むことになるのだ。

林檎ちゃんの逆襲（後書き）

こんなゲームが欲しい！！
伏せ字は気にするな！

たった一つの冴えたやり方

――2週間後。

その日の彼女はハイテンションだった。そりゃあもう気分は有頂天ホテル。なんてったってずっと思い人だったルックル良し、性格良しの先輩から直々に呼び出されたのだ、しかも自宅に。

風の噂で、最近付き合い始めた彼女との関係が少し微妙になっていると聞いた。何やらここ最近、彼の部屋に出入りしていない、大学でも目を合わせていない、らしい。

バイト先で接する限りは特に変わった様子もないのだが、そんな本日のバイト終わり、「ちょっと相談したいことがあるんだけど……時間、あるかな？」なんて真顔で言われてしまったら、二つ返事で引き受けるしかないだろう。

一旦自分の部屋――下宿している親戚の家なのだが――に戻ってメイクをなおし、服も選んだ。自分に何が似合うのかある程度分かっているつもりだから、今日はとにかく攻めていこうと思う。赤いチェックのキャミソールと黒いレースのミニスカートで、小悪魔風に。グロスもピンクのラメ入りを重ね塗りして、厚みを持たせる。

鏡の向こうにいる自分は、完璧に作り上げられた表情で微笑んでいた。

「……ふふっ」

これで接近戦に持ち込めば勝てる、そんな気さえしてくる。

夜も次第に深くなる午後11時、彼の家へ向かいながら、隠せない笑みがこぼれた。

ようやく自分の順番が回ってきたと思う。高校生の頃は姉に遠慮して、結局、遠くから見ていることしか出来なかった。二人が引きあっていく様子、離れていく様子を一番近くで見続けるという拷問に耐えたからこそ、今の自分があると思っている。

変わろう、変わりたいと強く願ってきた。同じ大学に進学できた

ことも追い風になり、何よりもあの時のように後悔しなくなかった。誰よりも彼を強く思ってる、その自信はあるから。

だから、ようやく手に入れたチャンスを逃すわけにはいかないし、手段は選ばない。どんな手を使っても、必ず彼の隣をゲットしてみせるっ！

……なんてことを考えながら、彼女・宮崎林檎ちゃんは彼の家へスキップしながら近づいていく。

街灯やコンビニの明かり、車のヘッドランプに照らされた地上は明るい。明るすぎて……照らされている場所以外、見えないのが現実だけだ。

全てを照らす満月を見上げることもなく、彼女は進む。

その先に、どんな惨劇が待ち受けているのかも知らずに。

彼はマンションの入り口で出迎えてくれた。相変わらずの優しい笑顔を、彼女だけに向けて。

「ゴメン。いきなり呼び出しちゃったけど……」

「気にしないでください、先輩。私でお役に立てるのであれば何でも言うてくださいつ」

最初はとにかく笑顔！そして、あまりこれが、彼女が今まで体験してきて実感した勝利の方程式その1である。

その2以降もこれから実践して、押しの弱そうな先輩を自分のペースに巻き込んでしまおう。そのために、今は我慢である。徐々に巻き込んで、彼が巻き込まれていることに気がついたときには、もう、取り返しがつかないように――

「宮崎さん？」

「えっ！ あ、ゴメンなさい……って先輩、その呼び方やめてくださいよ」

むうっとむくれてみると、彼は苦笑いで何も言わなかった。まあ、そんなこと些細な問題。これから何とかしていけばいいのだ。

時間は……まだ、たっぷりあるのだから。

彼と一緒にエレベーターで4階まで。そして、部屋までの廊下を歩きながら、ふと、

「宮崎さんなら、俺のこと昔から知ってるし……だから、相談に乗ってほしいんだ。いいかな？」

「はい。私で良ければ、いくらでもお話聞いちゃいますっ！」

ここはあくまでも普段通り。まだ自分の手の内を明かすわけにはいかない。焦らず、機を逃さず、確実に――頭の中で計算を巡らせつつ、普段より人懐っこさと笑みを3割増にしておく。

対する彼は、普段とは違う、真面目な声。覚悟はしていても鼓動が早くなってしまう。動揺を悟られないように、一步一步、確実に前へ進む。

そして、部屋の前。彼が、その扉を開いた瞬間――

「――薫、遅かったじゃねえか」

室内にいた「彼」の姿を目の当たりにして、彼女の思考回路は完全に凍結した。

誰もいないと思い切っていた室内に、彼女の知らない男性が一人。しかも地味にイケメン。思わず胸が高鳴ったのは女性だからしょうがないとして。

友人が遊びに来ている、普通ならばそう考えるだろうし、彼女だっけそう思いたい。

……彼の上半身が裸である、という、現実さえ見なければ。

シャワーを浴びた後なのだろうか。だとしても家主でもない彼がこんな格好で玄関に出てくる必要はないはずだ。

水滴が滴り落ちる髪の毛をバスタオルで拭きながら、彼はネコの

ような眼で彼女を見つめ、決定的な一言を言い放つ。

「初めまして、俺の薫に何か用？」

「――え？」

耳を疑った、聞きたくなかった。

今……目の前の見知らぬ（イケメン）男は何て言った？

「大樹、紹介するよ。彼女は――」

「先輩！ あ、あの……そちらの方は、その……お友達、ですか？」

認めたくない、絶対に認めたくない。

彼が……自分の好きな人が、「そっち系」の人間だなんて！

しかし、そんな彼女の悲痛な願いを、大好きな彼は笑顔で打ち砕くのである。

「彼女はバイト仲間の宮崎さん。俺がちょっと、大樹との今後で相談したいことがあるからって……女性だったら、俺たちとは違う意見が出てくるかもしれないだろ？」

何だろう、これは……一体、何が起こっている？

綺麗な顔いっぱいの笑顔で紹介された彼女は、顔面蒼白。というより灰。今すぐに消えてしまいたい衝動に駆られるのはどうしてだろう？

彼に大樹、と、名前で呼ばれた彼は、「ふーん」と呟きながら近づいてきて、

「そうだな。早く俺と一緒に住みたいっていつも甘えるもんな、薫は」

彼の隣に並ぶと、明らかに「誘っている」流し目で見つめる。

「い、いきなり何言ってるんだよ大樹！」

どもって反論しながらも、完全に頬を赤らめている彼。

ここまで見せつけられれば、確信するしかない。

彼は、女性を恋愛対象として見ていない人になっていたのだ。

自分の近くにそんな人間はいないと思っていた。

まあ、彼の過去を考えれば否定出来ないけれど、そんな結論に達

したくなかったのだ。

しかも……絵になる。(笑) ↑彼女にしてみれば笑い事ではない。

「あ……あのっ！ わ、私、お邪魔みたいだから失礼しますっ！！」

2人の間からだだ漏れしているお耽美な雰囲気、免疫のない彼女が酔ってしまうのも無理はない。

脱兎よりも全力で走っていった(逃げていった)彼女の姿を見つめながら……薫は、いくらなんでもこんな「小芝居」に賛同してしまったことを、少しだけ、多分少しだけ、後悔したのだった。

「――お疲れ様。新谷氏の相談には、的確にアドバイス出来た？」

マンションの入り口でぜえはあと呼吸を整えている林檎ちゃんに、私は笑いをこらえながら話しかける。

私の存在に気がついた彼女が、ものすごい目で睨みつけてきた。

「あなた……最初から全部……知って……!？」

「勿論。私だって彼の相談要員だし……どんなジャンルでも受け入れる人間ですからね」

まあ、嘘だけど。

肩をすくめながら両手を広げてみると、林檎ちゃんは開き直ったのか……私をあざ笑う。

「ご愁傷様ね。さすがにああなっちゃった先輩にも同情するけど……貴女も絶対、先輩に好きになってもらえないわよ!？」

少し気になる言葉はあったが……ここで私がボロを出すわけにはいかない。

だから、私は口元ににやりと笑みを浮かべて、「それが？」と、聞き返した。

そう、前から一言、彼女には言っておきたかったのだ。どうしても、これだけは私の口から。

「私が好きになったのは彼だもの。彼がどんな人間なのかをある程度理解したうえで覚悟は決めてるわ。私はこれから、彼に好きになってもらう努力をするだけ。外野に何言われたって後には退かない。

自分なりにけじめをつけるまで、私は諦めないわよ？」

私の自分でも青臭いと思ったセリフに……林檎ちゃんは「バカみたい」と吐き捨てる、暗い夜道を歩き始める。

その後姿を、私はぼんやりと見つめ、

「……黒い美少女って、いじったり、端から見る分には最高ね」
相変わらずだった。

「こうやって会うのは初まして、ってことになるんだな。類友よ、初めまして。いつも薫が世話になってるみたいで……親友として礼を言わせてもらおうよ」

薫の部屋に戻った私を出迎えてくれたのは、今回のためにわざわざシャワーを浴びてBL攻め属性になってもらった私の類友、大樹君。

一応説明しておくが、前話後半から続いていた一連の言動は、全てお芝居。私が計画して大樹君が補完した、林檎ちゃんを諦めさせるための奇策である。

丁度2週間前、林檎ちゃんとのやり取りがあってから……私は、この計画に賛同するようけしかけたのだ。

これ以上思わせぶりの態度を取って、苦勞するのは薫だ。この辺で彼女には引き下がってもらおう——と。

まあ正直、彼が二次元BL好きなことをバラせばそれでよかったのかもしれないけど、どうせならばど派手にどっかんと。

そう思って、私は薫に大樹君を招集し、リアルBLの世界を再現するように提案したのだ。

勿論、彼は渋い顔をしたけど……何とか私が言葉で丸め込み。（ああ、私もその現場見たかったなあ……）

そして、今日、スケジュールをやりくりして駆けつけてくれた（彼は本当に忙しいらしい。作戦決行が2週間後になってしまったのも、大樹君のアポが取れなかったからなんだよね……）彼との初対面を果たしたのである。

ギャルゲー好きな彼が調達したゲームを、薫経由で私に回してもらっていたのだから……私に対する綾美的な存在。

こうして会うのは初めまして、なのだが……モデルが雑誌から出てきたかと思った。それくらい、薫と並んでも引き立て役にはならない存在感。

少し猫っ毛なのか、乾き始めた毛先がぐるりと踊る。感じる雰囲気から攻めタイプだろうと推察しているんだけど。

「いやー……男性に縁のなかった私が、いきなりこんなイケメン（しかも同類）とお知り合いになれるとは。」

自分の運を一生分使ってしまったような気がして、どうしようかと途方に暮れる。

そんな私を、彼はまじまじと見つめて、

「しっかし……君が都ちゃんか。正直意外だな」

「はい？」

彼に不釣合いだって言いたいのかコノヤロウ。齒あ食いしばれにや！

私の不機嫌な顔で言いたいことを察したのだろう。「いや、決して悪い印象じゃなくて」と、大樹君はナチュラルに訂正し、

「――安心したんだ」

「安心？」

「ほら、あいつってすぐ女の子に言い寄られるだろ？ だから今回も、変な子に引っかけたんじゃないかって……正直、心配してたんだよ」

なるほど。薫と大樹君の付き合いは私より長い。高校時代の薫を知って、世話を焼いていた彼にしてみれば当然の心配だろう。

……本当に君はギャルゲー好きなんだよね？ 今日も全部演技だよね？

私が向けた疑いの眼差しを、彼は先ほどの「変な子」発言を気にしたと思ったのか、慌てて取り繕う。

「都ちゃんはしっかりしてるし、薫のこともちろんと分かってくれ

てる。だからもう、あの時みたいな失敗は――」

「――大樹！」

刹那、部屋の片づけをしていた彼が、大声を出して大樹君の言葉を遮った。

でも、私は……すっかり聞いてしまったんだ。

あのときみたいな失敗。

一体、何の話だろう？

「大樹、俺のことは自分で都に話す。だから――」

「了解。外野はさっさと退散しますよ」

状況を把握しきれない私を無視して、二人の間で話がまとまった。立ち尽くしたままの私とすれ違いざま、

「じゃあ、都ちゃん……綾美によろしくね」

私の親友の名を告げる。

「へ！？ あ、ちよつと!？」

どうしてそこで綾美の名前が彼の口から!？

聞いたです間もなく、扉がバタンと閉まる。

わ……分からない人だ。つかみ所がないというか、何を考えているのか分からないというか。

私が呆然と、彼が出て行ったドアを見つめていると、

「都」

後ろから名前を呼ばれる。心臓が止まるかと思った。

大袈裟な表現じゃない。2週間前にこんな悪戯を仕掛けると決めてから、私は……薫の彼女じゃなかったのだから。

林檎ちゃんを完全に騙すため、私たちはこの2週間、学校以外で顔をあわせなかった。大学ですれ違って……特別、会話を交わすこともなかった。(まあ、会うこともほとんどなかったんだけど)

芝居だって分かっている。企画したのが自分自身なのだから、文句は言えない。成功するって確信していたし、しなかった場合の対処法も考えていた。

だけど。

彼は振り返った私の手を掴み、そのまま力任せに引き寄せた。
正直、腕は痛かったけど……でも、そんなこと気にならない。

「会いたかった」

そう言ってもらえるだけで、その分の辛さも吹っ飛んでしまうってものでしょ。

「こんな思いになったの……初めてなんだ。都に会えないのがこんなに辛いなんて、思わなかった」

「アリガト。そう言ってもらえるだけで嬉しいよ」

「だから……」

だから。

私はその言葉の先にあるのが、幸せな結末だと信じて疑わなかったのに。

「俺……やっぱりダメだ。これ以上、都に辛い思いはさせたくない」

彼の言葉を肯定的に理解したかった。

「薫……？ いきなり、何言ってる……」

だけど、不意に腕をほどいた彼の表情を見た瞬間……私は、立ちつくすしかなかったのである。

たった一つの冴えたやり方（後書き）

BL要因キター！（違）お待たせの大樹登場です。彼は次のエピソードでもキーパーソンなので、見守ってあげてください。
そして：林檎ちゃんに合掌。

見失ったピース

初めて、見た。

こんなに切ない、彼の顔は。

そんな彼が紡いだ拒絶は、私を混乱させるだけで。

「薫……私には、君が何言ってるのか、分かんない、よ?」

涙が出るかと思った。いや、瞳は既に潤んでいる。

呆然としたままの私を、彼もまた、今の私と同じような表情で見つめて、

「俺は……都の側にいたいって……思ってる」

「だったら! さっきの言葉はどういうこと!? 私、だって……私だってねえっ!!」

意味が分からない。お互いに一緒にいたいって思っているならそれでいいじゃないか、そのどこに問題があるっていうの!?

激昂した私の頭に……聞き分けなく泣き叫ぶ幼い子どもを諷めるように、彼はそつと手を置いた。

「都は……これからも、こんな思いをしながら俺と付き合いなくちゃならないの?」

「え?」

「俺が……また何か、別の人間関係でトラブルを起こすと、都は手を貸して、きっと俺を助けてくれる。だけど……その度に都は、嫌な思いしなくちゃならないんだろう?」

彼が何を言っているのか、何を伝えたいのか……正直、全く伝わってこなかった。

これが、彼なりの優しさ?

これは、寂しかったって思った私への、試験?

理解できない、理解したくない、訳が分からない!

「そうかもしれない、けど……でも、そんなの私は構わない! 私

はっ……!!」

「——やっぱり、俺はこれから、都を傷つけながらじゃないと、一緒にいられないの?」

「違うでしょう!？」

思わず叫んだ。

違う。

そうじゃない。

違うんだよ、薫。

どうして……そういう風にしか、考えられないの?

「ど、うして……どうしてそういう考え方になるかなあっ! それ

こそ、薫が自分のことしか考えてないからそうなるんでしょう!？」

私の気持ち、考えてくれたこと……」

ここまで一気にまくし立ててから、我に返った。

私は、薫の気持ちを……考えたこと、あった?

林檎ちゃんに言われるまで、気付かなかったくせに。

もしかして、こうなるまで彼を追いつめたのは——

——私?

「……頭、冷やしてくる」

これ以上一緒にいると、彼に更なる暴言を吐いてしまいそうで。そんな自分を許せるはずもなく、私はきびすを返して部屋を出て行く。

何かがずれてしまっている気がした。

私のせい? 薫のせい?

分からない、分からないけど……薫が、遠い。

それから……彼の部屋に戻れなかった。

薫が言いたいことは、何となく分かる。

分かるけど、でも……こうやってすれ違うのって、寂しいというよりも、悲しいね。

そりゃあ、私は寂しかったよ。自分から言い出したことだっていう事実が私を責め続けた。彼女を欺くために徹底して、メールも電話も一切していなかったから……彼との接点がないこと、たったそれだけのことが寂しくて、胸が痛くて、切なくて……気づいたら涙が溢れていたんだ。

それくらい好きになっていた。ゲームをやりたいって理由はとっくに口実で……最近、そんな口実がいらなくなった関係に、飛び上がりたいほど喜んでいたのに。

そんな自分の変化に気づいていた。照れ隠しばかりが先行して上手に伝えられなかったけど……でも、君は気づいてくれているはずだって、確証のない自信が私の唯一の支えだったのに。

それなのに。

考えが、まとまらない。

授業も、バイトも、全然身が入らない。彼の言葉の意味が理解できずに、ネガティブな思考はマイナスのことばかり考える。

薫は……もう、私のことが好きじゃなくて、でも、彼は優しいから、私を傷つけないように断ったんじゃないか、って……何度も、考える。

でも、それを本人に確かめる勇気がなくて、財布の中に入っている合鍵を握り締めては、一人、やるせない思いでベッドに転がって

いた。

そんな日々が、4日ほど続いた……ある日の、こと。

「あ——都ちゃん、ちょっといいかな？」

大学からの帰り道、コンビニの前で私を待っていた大樹君は、近づいてきた私を見るなり、苦笑。

「すっかり表情が死んでるね。誰かさんと同じってわけか」

「誰かさん？」

「そ。すっかり説明する順番を間違えて自滅した、俺のアホな親友と……だよ」

大学構内は、夕方になれば人の数が少なくなる。

風が少し冷たい、図書館前のベンチ。互いにジュースを買って座っている私たち以外に、人影は、ない。

大樹君も黙っていれば女の子が放っておかないので、正直、誰もいないのは助かる。これ以上変な噂を立てられたくはない。

「あ、そうだ。聞こうと思ってただけど……大樹君、綾美と知り合いなの？」

「ああ、知ってるよ？ 彼女は俺のライバルだからね」
ライバル？

言葉の真意がつかめない私へ、彼は至極分かりやすい説明をしてくれた。

「俺も同人作家なの」

「え、嘘っ!？」

「本当だよ。まあ俺が描いてるのは、ある意味綾美と正反対のジャンルなんだけど……綾美とはイベントデビューした時期が同じで、最初の頃はよく隣のスパー スだったんだ。ただ、綾美はもう、結構な人気者になっちゃったから……ココ2年くらいはまともに会ってないし、俺のことなんか覚えてないと思うけどね」

「でも、よく私が綾美の知り合いだって分かったね？ 綾美から聞いたわけでもないんでしょう？」

私が彼女と知り合ったのは高校生の頃だが、最近彼女と会っていない彼が、綾美と私に関する話をするとは考えられない。

「都ちゃん、薫に自分は綾美の知り合いだって言ったら、スケッチブック渡されたら？」

「え？ うん……薫、なぜか綾美の名前だけは知ってたから……」
……あれ？

ちよつとまって。色々出来すぎてない？

確かに彼はBL好きだけど、同人の世界まで深く把握しているわけではない。むしろ、同人に関しては表紙でジャケ買いするようなタイプだ。

そんな彼が、綾美のことを知っている理由、それは、

「薫をあの世界に——BLの世界にそそのかしたの、実は俺なんだよ」

彼の言葉でパズルがはまった。そんな気がした。

「薫はこの間、自分の口から説明するって言ってたけど……結局説明してないんだろ？ 詳細は本人の口から聞いてもらいたいんだけど、概要くらいは、今の都ちゃんも知る権利がある」

手にした缶コーヒーをすすり、彼は、話し始めた。

「俺は今、専門学校の2年生だ。薫は一浪してるから大学1年生。ねえ都ちゃん、どうして薫は一浪したんだと思う？」

「どうして、って……」

「俺が言っても実感ないかもしれないけど、薫、普通に頭いいんだよ。この大学だって、余裕で現役合格出来るだけの力を持ってた。だけど……俺たちが高3の夏、産休に入った先生の代わりに、臨時で若い女教師が赴任してきてさ。そいつが教師って立場を忘れて、薫にしつこく付きまとったんだ」

——あ。

思い出すのは、そんなに遠くない過去。私が興味本位で話を振っ

た、その時の言葉だ。

「……付き合っていない。断った」

「あの先生のおかげで女性が怖くなったんだよね……ストーカーみたいで、参ったよ」

半分は冗談だと思った。だけど、実際はそうでもないらしい。大樹君の口調と表情から、十分理解できる。

「薫にはその時、別の学校だったけど付き合ってる彼女がいたんだ。そりゃあ、男子校にいてもモテまくりで、告白されない月はないくらいだったけど……」

「それって、ゲームが好きだっていう……?」

「あれ、都ちゃんも知ってたんだ。そう、やたら格ゲーが強くて、本人も気が強くて、だから上手くいっていたのかもな」

その彼女が、林檎ちゃんが言ってた「元カノ」か。

本人以外から、彼の過去、しかも女性関係に関する話を聞くのは、やっぱりどこか複雑だった。

「どうして別れちゃったの? どうして薫は……BLの世界に逃避するようになったの?」

聞きたかったけど、聞けなかったこと。

私は何を聞いても受け止める、そんな心境で、大樹君の言葉を待った。

「その教師、性質が最悪の女でさ。臨時の職員ってことで学校を掛け持ちしてたみたいで、教師って立場のクセに、偶然授業を担当している薫の彼女にあからさまな嫌がらせをしたり、薫を待ち伏せたり。そんなことが続いて……さすがに我慢しきれなくなった薫は、教師本人の所に行ったんだ。これ以上、俺に付きまとうのはやめて欲しいって」

あの薫にそこまでさせるってことは、相当、だな。

ある程度予測していたので表情を変えずに聞くことができたけれど、さすがに、次の言葉には絶句するしかなかった。

「その時、薫と教師がどつかの教官室で2人きりだったみたいなんだけど……女教師が突然悲鳴上げて、近くにいた別の教師が教官室に殴りこんでみれば、彼女のうえにまたがる薫を発見した、しかも教師の着衣は乱れてる、ってわけだ」

「なっ……!？」

フィクションでもシャレじゃ済まない事態。そんなことが実際に起こったら……。

「結局、薫は謹慎処分。ただ、俺たちは薫のキツイ顔を見てきたから、その話を信じなかった。クラス全員で結託して、その女教師に真相を吐かせて辞職には追い込んだけど……それが高3の冬だぜ？ 薫は受験に臨めるような精神状態じゃなかったし……付き合ってた彼女が、周囲の噂を、薫が教師を襲ったっていう方を、信じてしまった」

「さすがにああなっちゃった先輩にも同情するけど……」

あの林檎ちゃんの言葉は、彼の過去やその真相を知っていたから。あれだけ一途な林檎ちゃんのことだ。周囲に惑わされず、自分の力で真実を突き止めたに違いない。だから、あれだけ強く想い続けることが出来るんだろう。

「——やっぱり、俺はこれからも、都を傷つけながらじゃないと、一緒にいられないの？」

あの時の言葉は……このときのことを思い出したからなの、薫？

「彼女とは学校が違ったから、しょうがないんだけどさ。結局彼女は他県の大学に進学を決めて、薫の側からいなくなった。奴は今ま

で以上に女性への接し方を変えて……それから、誰とも付き合わなかったんだ」

今、彼に会ったら……私は、どういう言葉をかければいいんだろう？

「薫は何か立ち直ったように見えたけど、でも、それが空元気だっことはすぐに分かった。だから俺はわざと、自分が持つてるゲームや同人誌を奴の近くに置いたんだ。気が紛れればいいと思っただけで、元々、俺がそういう活動をしているってことは知ってたけど、実際に手にするのは初めてのもののばかりだったみたいだけだな。」

んで、奴が一番興味を示したのが――綾美の同人誌だったんだよ」
「綾美の！？」

「言わずもがな、ボーイズラブだよ。薫がBLを読み始めたキッカケは、綾美だったんだ。その親友が今の彼女だもんな。縁ってすげえや」

思わぬところで繋がった、私と薫。

その事実が、少し、嬉しかった。

それと、同時に、

「私……本当に、何も分かってなかったんだなあ……」

自分自身が、腹立たしくてたまらない。

彼の辛さを表面的にしか見ていなかった自分が、外見で色々大変、でもそこで終わりなんだと自己完結していた自分が。

名前を呼ばれることへの苦痛も、その先生が彼を名前で呼んでいたからだろう。そしてきつと、当時付き合っていた彼女も。

また、私は……気がつかずに、薫を苦しめていた。知らないなんて言い訳だ。彼が話せる覚悟を決められなかったのは、まだ、私にその資格がないから。

頑張って歩み寄ってくれたのに。名前まで呼んでくれたのに……。

私は……彼に、信用されてなかったのかな。

無意識のうちにハンカチで顔をおさえる。涙が……止まらない。

「都ちゃん、君が自己嫌悪を感じることはないよ。話さないままで自分の判断だけでキミと距離を置こうとした薫が悪いんだ」

「でも……私、何も知らなかったことを言い訳にしたくない。薫が話してくれなかったのは、私のことを心から信じてくれなかったから。そんな行動をしなかった私も……悪いんだから」

目の前のゲームと、薫。その二つを同時に手に入れた充足感で、大切なことを見失っていた。

そして、ようやく少しだけ彼に近づけた、そんな気がした。

大樹君もこの事実を話す人間は慎重に選ぶはずだ。私はようやく、彼と向き合って話せるだけの情報を手に入れたんだ。

「でもやっぱり、薫も……私に分かってほしいなら、もうちょっと話してくれなきゃ、だよね」

「そこは本当に面目ない。俺の調教が足りなかったみたいだ」

「……大樹君、本当に薫のこと、親友としか思っていないよね？」

涙を拭いた私が疑いの目を向けると、彼は綺麗な笑顔で断言する。

「俺は美少女が大好きだ！」

よし合格。

彼に向って無言で親指を突き出しつつ……私は、脳内で情報を整理する。

これから彼と向き合うには、どうすればいいだろう？

「……って、複雑に考える必要はないんだよね。私が直接、言いたいことを言って……後は薫が決めることなんだから」

そう、私との今後をどうするのか……それは、私が決めることじゃない。

ようやくスッキリした私に、彼は軽く頭を下げて、

「親友として頼むよ。本当にそう思うなら、薫の近くにいてやってほしい。それで、奴の誤解をといてやってくれないかな？」

彼のいう「誤解」の意味が分からず、私は首をかしげる。

「薫の、誤解？」

「薫は多分、昔の彼女と都ちゃんを重ねてしまってると思う。だから、当たり前だけど彼女とは違うって……バカな親友の頭にこれでもかってくらい。叩き込んで欲しいんだ」

さすがに私は苦笑するしかなかった。

「……ははっ、なるほど、ね……まあ、しょうがないかな」

本当だよ、彼は大馬鹿だ。

私が……当時の彼女と同じだと思った？ 別の女性と噂が立ったら別れを切り出すような、そんな女だと思った？

「正直、何も知らない都ちゃんをここまで引っかけ回したんだ。薫が愛想をつかされてもしようがない状況だってことは分かってる、けど……」

「……大丈夫だよ、大樹君」

彼の言葉に、私は一度だけ頷いた。そして、

「これくらいの問題がないと、単調なシナリオってことでユーザーからクレームが殺到しちゃうわ。大樹君が話してくれたおかげで、私は完全に彼のルートに入ってたって確信してるから……後は私が間違えなきゃ、トゥルーエンドに行けるはずでしょ」

精一杯の強がりも、何とか様になって。

私は一度空を見上げて……この場にいない彼を、想った。

そして、私は……今、彼の部屋にいる。

どうやら今日も、部屋の主は夕方からバイトらしい。この時間っていないってことは、多分あと30分後、10時過ぎに帰ってくるはず。

私は電気もつけずにベッドに転がって、ただ、そのときを待っていた。

反射的に布団をギュッと握り締める。抱きしめてくれた彼の温もりはない。何度も私に笑顔を向けてくれた、優しく抱いてくれた彼が……今は、いない。

「あ……」

不意に、彼の匂いを感じた気がした。それだけで彼が近くにいるような錯覚。

でも、手を伸ばしても……誰も、いなくて。

「何、やってるんだろ……いるわけ、ない、のに……っ」

抑えていた感情が、堰を切ったように溢れていた。

あの手を、腕を、離したくなかった。

名前を呼んで、髪を撫でてくれる彼がいない。

いつも床に座って文庫本を読みふけり、ゲームに熱中する私へ苦笑いを向ける彼が……

薫が、いない。

「うつ……あつ、ああつ……!!」

背中を丸めて嗚咽をかみ殺した。今は泣いちゃいけない、もうすぐ彼が帰ってくる時間だろう。それまでは……彼に自分の正直な思いをぶつけるときまでは、泣かないって……泣かないって……!

「泣かないって……決めたのに……」

ココで泣き出したら、私は自分を見失ってしまう。そんな気がして。

自分の中にある最大の見栄を振り絞り、涙をぬぐう。声を上げて泣くことを必死に我慢していた。

——と。

扉のほうから、鍵ががちゃりと差し込まれる音が聞こえた。けれど——鍵を回す音はしない。ただ、少しだけ沈黙。

そして、ゆっくり扉が開いて、

「みや、こ……?」

確かめるような彼の言葉に、私はベッドから身を起こす。

廊下の明かりで、逆光の状態。だから顔は見えないけど……彼が、

そこにいた。

見失ったピース（後書き）

薫にイライラしないであげてください……彼も一生懸命なんです。
大樹、いい奴だ。ある意味彼が元凶ですからね。功労者です。
さあ、物語は大詰めです。最後までお付き合いくださいませ！

good night [1]

彼はそれ以上何も言わず、無言で、扉を閉めた。

再び薄暗い室内。外からのわずかな明かりだけで浮かび上がる2人の姿は……やけに、幻想的で。

目の前にいる薫は幻で、手を伸ばしたら消えてしまうんじゃないかって、思った。

「都、だよな？」

「……そう、だよ」

先ほどまで爆発寸前だったんだ。一瞬で泣き顔を隠せるほど、器用な人間じゃない。

今だって、薫が目の前にいるってことだけで……今すぐ胸に飛びついて泣きたいのに。

彼は電気をつけようとはせず、ベッドに座っている私へ、一歩一歩、近づいてきて。

「泣いてるのか？」

「……泣いてないわよ」

泣けない、泣くもんか。彼に自分の言葉で、ちゃんと伝えるまでは。

本当は立ち上がって、彼を正面から見据えたかった。だけど、ベッドに座ってうつむいたままが精一杯の私は……声を震わせながら、切り出す。

「ねえ、新谷氏……あんた、バカよ」

唐突に言い放った言葉。だけど、私の前に立った彼は何も言わず……ただ、次の言葉を待つ。

「そう、大馬鹿なのよ……いつまで過去の恋愛を引きずってるの？ そりゃあ、忘れろなんて言わない、そんな酷なこと、言える立場じゃないと思ってる」

そう、君の過去は私に関係ないって思ってた。だから今まで踏み

込まなかったし、あえて強く尋ねることもなかった。

「だけど、君が現在だけで『新谷薫』であるわけがない。君が君になった過去を知らないまま、この先、付き合っていけるわけがないんだ。」

そして、私は君のそんな過去を知って……もっと、君に近づきたいんだよ。

「けどね、今の女に過去の女の影を重ねてどうするのよ？ 情けないなあ……これからもずっと、そうやって生きていくつもり？」

もっと、君を好きになりたいんだよ。

彼は、何も言わない。

最後までちゃんとと言えるかな？ 我慢しきれずに涙がこぼれる。

泣くな、まだ泣いちゃダメだ。泣いたら喋れなくなる、伝えられなくなる。もう少し、もう少しだから。

私は歯を食いしばって、泣き出す自分を制御し続けた。

「新谷氏がどんな価値観で生きてても……私は否定出来ない。だって、新谷氏の生き方は、新谷氏が決めるべきだもの。そうでしょう？ いきなり出会った事情も知らない女に……我が物顔で指図されたくないか、ないわよ、ね……」

けどね、薫。

「だけ、どっ……新谷氏は、私に名前で呼ぶことを許してくれた！ それは、少なくとも私が「いきなり出会った事情もしらない女」からランクアップしたんだって……私は、そう、思っ……っ……！」

嬉しかった、本当に嬉しかったんだよ？

合鍵をもらった瞬間も、名前で呼んでって抱きしめてくれた瞬間も、薫と過ごした時間、全部。

「私はずっと、新谷氏に認めてほしかった！ 新谷氏が過去に辛い思いをしてるなら、そのことも……事実そのままじゃなくてもいいから、伝えてほしかった！ 私だけ何も知らないなんて、ずっと、嫌だった……」

私が林檎ちゃんを好きになれなかったのは、彼女が私の知らない彼を確実に知っていたから。

そして、薫はそれを知りながら……私に何も話してくれない、そんな状況だったから。

「信じて……欲しかった、そんな保障が……ほしかった、からっ……！」

だから、ね、薫。

私の言葉に、逃げずに、真っ直ぐ返答して。

今の薫の気持ちを、私にぶつけて。

私は、逃げないから。

「私は……沢城都は、新谷薫が好きなの！
今更薫がどんな過去を背負ってたって、BL好きっていう事実の方が私にとっては衝撃的だったに決まってるでしょう！？」

でも……私は、薫のそういう一面しか知らないから、これからもっと色々知って好きになっていきたいと思ってるの！ だから教えてよ、直接言ってくれなきゃ何も分からないんだから！

それに……いいわよ別に、女教師でもロリでも誰でもかかってきないさいよ！

薫がどれだけハーレム状態になったって……私は絶対、薫を攻略してみせるんだからねっ！」

次の瞬間、彼の体が私に覆いかぶさってきて。

座っていたベッドに転がった私へ唇を重ねた彼は、そのまま、強く抱きしめた。

音が、なくなる。

それくらい静かな部屋の中で、ただ、彼の息遣いだけが届く。

「ゴメン……都、俺……」

「謝って欲しいわけじゃ……ない」

私を見下ろし、涙を拭ってくれる薫に、少しだけ、不機嫌な声を返した。

だって、私は欲しいのは……謝罪の言葉じゃないから。

私が欲しいのは、正直なキミの言葉だけ。

それだけ。

「……寂しかった。俺は過去を引きずって、都のことも、俺のせいで傷つけたなくて……これが都のためだって思ったけど、これ以上傷つけない自分への自己満足だったんだよな」

「一方的に思えたから、さすがに凹んだよ。でも、私も……薫のこと、きちんと知ろうとしてなかったと思う。ゲームにばかり目がいってたから、薫が心から信頼してくれなかったのは、私の行動にも責任はあるんだと思う」

「……優しいな、都は」

不意に表情が緩んだ。私の大好きな笑顔が、私だけを見つめている。

「あれから、俺の中にぽっかり穴が空いたみたいで……寂しくて、何度も都の部屋に行こうとしたけど、俺に今更、何ができるだろうって……」

眩きながら、もう一度、私を抱きしめる。

ベッドに沈んだ2人分の重さが、妙に嬉しかった。

「こんなに都のことを思ってたんだって……今更みたいに自覚して。だから、弱い自分から今度こそ脱却して、自分のことしか考えてなかったことを謝って、それで……ちゃんと、ちゃんと言おうって……」

…」

肝心なことが、何なのか。

彼もきつと、自分に問いかけていたんだろう。

一度呼吸を整えた薫は、私の耳元で、はつきりと囁いた。

「……俺は、都のことが、好きだよ」

声が、震えている。

「薫……」

「本当は最初にちゃんと伝えなきゃいけなかったんだ。遅くなってゴメン……俺、は……都のこと、誰よりも好きなんだって。誰よりも大切だから、俺の側にいて欲しいって……伝えたかったんだ」

その言葉を聞いた瞬間、また、涙が溢れる。

もう、ダメだ……嬉しすぎて息が詰まった。夢じゃない、目の前にいる薫は……幻じゃ、ない。

「分かって欲しい。私が一番辛いのは、薫の側にいられないことなんだよ?」

そう、君が原因のトラブルなんか、私にはどーってことないの。だって、トラブルを解決するときは……2人で一緒に悩めるんでしょう?」

悩もうよ。一緒に考えようよ。

「わた、しは……薫と一緒にいたい。それだけでいいじゃない。これからまた、色々面倒なことがあるかもしれない、けど……でも、私は、薫と一緒にいたい。それだけなんだから、ね?」

彼の背中に両腕を回し、私からもしっかり抱きしめた。

やっと掴んだ、彼の温もり。同じ空の下にいても、一番遠くに感じた存在が……今、一番近くに、いる。

離さない。離れたく……ない。

「……ね、ねえ、都……痛い」

「へっ!? あ……ご、ゴメン!」

私の横に顔をうずめ、耳元で息苦しそうに呟いた薫。慌てて両腕をほどくと、起き上がった彼が、笑顔で私を見下ろした。

うああ、思わず力んじやったよ……自分の失態に言い訳も思い浮かばない。どうしてこう、ロマンチックな雰囲気ぶち壊すかなあ沢城都。

決まりが悪くなった私を、彼がニヤニヤした表情で見下ろし、

「やけに可愛いキャラだな、都。もしかしてツンデレ？」

そんな薫に、私も思いつき言い返してやった。

「か、勘違いしないでよね！ 私は最初からツンデレよっ」

そして、薫は自分の言葉で話してくれた。

彼と彼女に何があったのか。何が、薫を不安にさせるのか。

good night [1] (後書き)

都がカッコイイ。やはり、彼女の人気はずば抜けて高いです……薫
頑張れ。

good night [2]

——あの頃は、キミとずっと一緒にいられるって……そんな御伽噺を、本気で信じていたんだ。

「俺と杏奈が別れた原因は、都も知ってると思う」

ベッドの上で私の横に転がり、薫が静かに語り始める。

寄り添うように彼にくっついた。彼の心臓の音が聞こえる。乱れていた私の気持ちを完全に落ち着かせてくれる。

「俺が先生を襲ったって噂は、俺の学校じゃすぐに沈静化したんだ。大樹や……クラスの奴らが俺の潔白を証明してくれたから、学校もすぐに対応してくれた。

だけど、それ以外の場所じゃ……どんな釈明も言い訳にしか聞こえなかったんだろうな」

——世界がどれだけ、俺を否定しても。

——キミだけは、俺の味方でいてくれるって……根拠もなく信じられたのに。

「俺は、杏奈なら俺の言うことを信じてくれるって思ってた。けど……その時、杏奈の気持ちは俺の予想よりずっと遠くにあったんだよ。

元々俺から告白したから、俺が頑張って彼女をつなぎとめればよかった、って……そんなこと思っても遅かった、遅すぎたんだ」

——聞きたくなかった。

「もう、無理だよ……私、このまま薫と一緒にいても疲れるだけなの」

——キミから否定された世界は、俺から色を奪う。

「杏奈から「一緒にいると疲れる」って言われたのが、予想以上にショックだったみたいでさ……自分はゲームばかり見ていたくせに、俺とそこまで一緒にいなかったくせに、って、正直思った。」

俺は自分のことしか考えてない女と別れて正解だったんだって、自分にずっとフォローしてさ……そうやって考えないと、押し潰されそうだった」

——色のない世界を見つめることに、何の価値があるだろう？

「だから俺は、ゲームに逃避するなんて考えられなかった。でも、心のよりどころが欲しくて……結局、杏奈みたいに夢中になれる何かが欲しくて……紆余曲折を経た結果、偶然、大樹が持っていた綾美さんの同人誌を読んだんだ」

——抵抗がなかったといえば、嘘になるけど。

——でも正直、本の中にいる彼らが羨ましかった。

——互いに想いあっている姿に、憧れたんだ。

「……辛いこと、思いださせちゃったよね」

何度聞いても覆らない現実、消えない傷痕。

知ることは私が望んだことなのに、残ったのは罪悪感。

薫は「いいや、大丈夫」と呟いて、ギュッと、私を抱きしめた。

「聞いてほしかったから。いつか、自分の口で話せたら……俺はちゃんと、都と向き合ったことになるかな、って、思ってたから。都がいてくれて、俺と向き合ってくれて……よかった」

やば……また泣きそうだ。

誰かに必要とされることがこんなに嬉しいなんて知らなかったから。

「……都？」

「よか、った……私、諦めなくて……よかった」

涙をこらえているのが一発で分かる声音で呟くと、不意に、薫は私の眼鏡を外して、

「やっぱ可愛いよ、都は」

まじまじと覗き込む。いくら視力が人並み以下とはいえ、至近距離では彼の顔もはっきり見える。私を見つめる大きな瞳を直視できなくて、思わず顔を横に背けてしまった。

「い、いきなり何？　っていうか、薫……いつから言葉攻めのキャラになったの」

「攻めだなんて滅相もない。俺はいつだって受けキャラのつもりだけど？」

さらりと言い放つ彼の言葉を、私は信じられずにジト目を向けた。だってそうでしょ？　受け専門キャラだったらとりあえず攻め好きの私と位置変わりなさい（＝薫が下になれ）ってのよ。

その視線に気がついた彼も、「いつだって、っていうのは嘘かな」と、少し顔を赤くしながら訂正して、

「都の前だと、ブレーキきかなくなるから」

それは、私に対する褒め言葉なのだろうか。

「褒めてるよ」

顔で語ってしまったらしい。また言葉を返せなくてそっぽを向く私の顔を、彼がぐいと正面へ戻して、

「ねえ、都……その……」

「？」

何だろう。

自分で私を正面に向かせたくせに、口ごもってしまう薫。

私がきよとした表情で見つめると、意を決した彼が……それでもためらいがちに、こんなことを言った。

「……………襲っても、いい？」

これだけ状況作っておきながら、まだ私に確認するのかこの男は。もしかして、そういうプレイ？

こういうときは……私も薫のこと好きって言ったんだからこの状況だって同意してるの。がばっとやっちゃえばいいのよ、がばあつと。

ただ、私のこと、大切に思ってくれてるんだよね？ 今だって、私がこの状況をどう思ってるのか……正直、不安なんですよ？

その不安、取り除いてあげるよ。

とおきおきの言葉で。

私は残った涙を拭うと、口元にやりと笑みを浮かべて、言った。

「よし、やっちゃえ☆」

good night [2] (後書き)

薫の思いを書きながら……彼って純粋な人だなあとしみじみ思いました。

素晴らしき日々

その後のエピソードを、少しだけ。

まずは、その心に大きな傷を負った……っていうか私が負わせてしまった林檎ちゃん。

さすがの彼女も最初は傷心で、バイト先で薫と顔をあわせるたびに、気まずい空気になってしまったらしいのだが。

私と薫がヨリを戻した（……別れていたわけじゃないんだけどなー？）ことなど、周囲からの情報、そして彼自身の行動を見れば一目瞭然。慌てて本人に問い詰めると、彼にしては珍しく、そしてきつと頑張って嘘の話を広げ、私と付き合っていることを彼女に告げた。

……という点は褒めてあげたいのだが、彼がノーマルでも大丈夫であることを確信した彼女は、また、以前の調子を取り戻そうとしている。ヲイ、どうしてもっと強く「これ以上関わるな」って釘を刺しておかなかったのかな？（そんなこと出来るような性格じゃないことは、私が一番分かっているけど）

ただ……林檎ちゃん、私を見つめる目が少し違うのだ。何と言うか、ライバル視なんだけど前のような軽蔑じみた視線ではない。噂では、私が「どーやって薫をノーマルに引き戻したのか」を必死に探っているらしい。ご愁傷様である。絶対に真実は教えてあげないけどさ。

そして次、思わぬ功労者になってしまった綾美と大樹君。

綾美に何となく彼の話をすると、途端に顔色を変え……「今すぐ会わせろ」と詰め寄るではないか。

なーんだ、綾美も彼のこと覚えてるじゃないかという安心はすぐに消え、どうしてそんな顔になるんだらうという疑問と、恐ろしさ

が。

普段の彼女からは想像も出来ないほど焦っていたので、私も緊急事態だと思ってすぐさま薫経由でコンタクト。

ただ、彼は色々忙しい身なので（専門学校ってそんなに忙しいのかな？）……実際、2人を引き合わせられたのは3日後だった。

そこで、事件は起こる。

待ち合わせ場所は賑う駅前。しかし、彼女は出会い頭に彼の胸倉を掴むと（あのー……ココ、街中なんですけど綾美さん？）、その綺麗な顔で再会の挨拶もなしに、いきなり詰め寄ったのだ。

「大樹、説明しなさい！！ 2年前、どうしていきなり音信普通になったの！？ 夏コミにFat○で合同本出すって話だったのに……アンタの埋め合わせで、あたしはあの4日間、地獄を見たんだからね！！」

あ、あの……ココ、街中……まあ、綾美がそんなことを気にするわけではないと思うけど。

ただこれで、薫が綾美にあのイラストをリクエストした理由が何となく分かった。

綾美はずっと、合同本で最初に描くはずだったキャラを……描き続けているんだ。

道行く人が、聞きなれない単語に首をかしげながら、でもしっかりコチラを横目で見つめながら通り過ぎていく。

そんな彼は、彼女の剣幕に苦笑を浮かべながら、

「いや、アレは本当に悪かったって！ ただ、急に親が引越すことになってさあ……あの地域でのイベントに参加出来なくなったんだよ」

「連絡くらいよこすのが、相方に対する礼儀じゃないの！？」

「その通りでございます……」

怒り沸騰の綾美と、真実を語ろうとしない大樹君。コレは明らかに平行線。私と薫は、そんな2人のやり取りを放心状態で眺めながら……「なあ都、俺たちだけでどっか消えないか？」「そうね、そ

れがいいような気がする」と、この場から脱出する計画を話し合っていた。

ただ、

「……出してないから」

掴んでいた手を離し、彼女がぽつりと呟く。

「綾美？」

「あの時の本、まだちゃんと出してないから。あんたが4日後に原稿を仕上げるって言うなら……今から印刷所に掛け合ってあげるわ」それが、彼女の伝えたいことだったんだと、私は思う。

それから2人がどうなったのか……それは、また、別の話。

そして、私たちは――

「と、いうわけで薫、コスチュームプレイ、略してコスプレよ!!」

「正直、詳細が意味不明なんですけど……」

話はざっと、数分前にしかさかのぼらないけれど。

今日も今日とて、ゲームをするため……と、薫とラブラブするために（笑）合鍵を使って侵入していた私。

部屋の中で新作ゲームに興じていると、時間通りに彼が帰ってきて。

そして、薫がバイト先で使っている制服一式を持って帰ってきたことが全ての発端である。

「へー……こんな制服だったっけ。ファミレスって感じだね」

ネクタイやブラウスをチェックしながら、よく分からない感想をつぶやく私。

エプロンしか支給されない私のバイト先とは違って、彼の場合は上から下まで全部貸してくれるのである。まあ、ファミレスだしね。統一感が必要なのは当然だろう。

白いブラウスにブラウンのネクタイとズボン、汚れが目立ちそうな気もするんだけど……さすがは薫、油污れ一つなく、ブラウスが輝いて見えるよ。

「俺は接客中心だから、そこまで汚くないけど……厨房中心の奴らは相当汚いらしいな。俺も見たくないくらいだし」

「へえ……」

もの珍しく眺める私を、彼が苦笑で見つめ、

「そんなに珍しい？」

「いやだって、制服っていわゆる一つの萌え要素じゃない？」

「……そういうことを真顔で言われても……第一、ファミレスの制服じゃ萌えないだろ？」

「そうかなあ？ 私はそんなことないと思うけど」

大学生になると、制服という概念から遠い日常を送ることになる。それこそ、バイトでもしない限りは制服なんか着ることはない。

中高生時代に飽きるほど着ていた服装が、今では妙な輝きを持った思い出として頭の片隅に残っている程度なのだ。

だから、どんな制服であれ……制服であることに違いはない。（当たり前）

制服、かな。薫が着たら、きっと似合うんだろうなあ……。

「……着て欲しいなあ」

「都？」

本音をつぶやいた私を、今度は怪訝そうな顔で見つめる薫。

「ねえ薫、その制服、今から着てみてくれない？」

「は？」

「だって、見てみたいんだもん。バイト中であんまり来ないで欲しいって言うから……私、一応遠慮してるし」

一度、冷やかし程度に綾美や大樹君と一緒に邪魔したことがあ

るのだが……私たちのマイペースな態度に、彼が泣きそうな顔で「頼むから、俺がバイトしてる間は来ないでくれ」と訴えられたのは、そんなに遠い昔でもない。

……まあ、あれはどう考えても私たちが悪い。だから、それ以後、薫のバイトの邪魔はしないようにしているんだけど。

「ねえー、いいでしょー？ 着てよ、着てよー」

「やだよ。第一、汚れて洗濯したいから持って帰ってきたのに……洗濯する前の服に腕を通せて言うのか？」

「いいじゃない別に。どうせ、この後シャワー浴びるんでしょ？」

私が犬のようにせつつくので、薫は一度ため息をつくど、

「……何を期待してるんだか」

おもむろに、着ていたTシャツを脱いだ。

おお、何気に生着替えですか？ まあ、今更だけど。

「と、いうわけで薫、コスチュームプレイ、略してコスプレよ!!」

「正直、詳細が意味不明なんですけど……」

ぶつぶつばやきながらも、白いブラウスに腕を通してくれる。

「細かいことは気にしないっ☆ もしかしてメイド……じゃないや、執事さんっぽい雰囲気になったりするのかな。ねえ薫、お嬢様って言うって？」

「興奮しないでください、お嬢様？」

携帯カメラさえ構える私を、びしっと指差しして忠告。

そして、数分後。

目の前に現れたのは、完全無欠のウェ이터だった。

……正直、自分がここまで興奮するとは思っていなかったの……彼の顔をまともに見れない沢城都であります。

シンプルな制服が、整いすぎた彼をよりいっそう引き立てているように見えた。彼がバイトしてる店が繁盛する理由も分かるよ……女性客が多い理由も納得するよ！ 悔しいけどっ!!

そう、コレこそ制服の役割。着ている人間の個性を殺さずに引き立てる、決して自己主張はしないけれどもその存在理由はある、縁の下での力持ち。(何か違うような気もするけど……まあいいや) 単なるウェイターでさえこんなに色々考えてしまうのだ。これでもう、ブレザーとか白衣とか着られた日には……私、命が危ないかもしれない。色んな意味で。(笑)

「……そんなにまじまじと眺めるほどでもないだろ？」

無言で、ただじっと見つめる私を、ただ、呆れた顔で見つめ返すしかない薫。

思わず本音を呟いた。

「脱がしていい!？」

「せっかく着たのに襲うな!」

「ねー薫ー、他に制服ってないのー? コスプレしてよー、コスプレー」

「大学生の部屋で制服を期待するな」

後ろから彼に抱きつく形でくっついて訴える私を、彼は相変わらず呆れ顔であしらう。

でも、呆れられたっていいもん! だって、制服は一種のロマンでしょう!?

「都がそんなに制服フェチだったなんて、知らなかったぞ?」

「まあ、最近はファミレスでもマニアックな制服って多いじゃない? 薫のところはそうじゃないけど……もう、本当にメイド喫茶すれすれの制服だって多いような気がするの」

今までは、そういう可愛い服装を可愛い女の子が着こなしてれば満足だったんだけど……でも、薫と一緒にいるようになってから、男性の制服にも目がいくようになって。

もともと白衣とか好きだったし……警察官も、よく見るとカッコいいよね?

「ねえ薫ー、白衣とか持ってないの?」

「文系の俺に何を期待してるんだよ！」

さすがに無理か……本気で落胆する私に、

「制服、ねえ……」

「薫はこだわりとか、ないの？ やっぱり白衣萌え？」

「王道だけど好きだな。特に医者白衣が好きだ」

「そう？ 私は理系の白衣が好きなんだけどなあ」

白衣といっても、その好きは更に二つへ分岐する。

ずばり、医者白衣か、理系学者白衣か。薫は前者、私は後者である。

まあ、二人とも両方好きなことに変わりはないと思うんだけどさ。

「都って、スカートはかないよな？」

「だって、胡坐かけないじゃない」

後ろから大真面目に答える私に分かるよう、彼はわざとらしく体を揺らしてため息をつき、

「……そもそも、スカート持ってるか？」

「覚えてない」

「……俺が買ったら、着てくれる？」

「そこまでしてもらわなくても……っていうか、別にデニムでもいいじゃない。ひよっとして生足フェチ？」

「男は誰だってそうだ」

そうだったのか。私はむしろストッキングに反応してしまうんですけど。

「じゃあ、明日は一緒にスカート買いに行こっか。薫が選んでくれるんなら、私だって着るよ……多分」

多分ね。私の気が変わらなければ、だけど。

でも、

「スカートかあ……私がスカート着用なんて、それだけでコスプレよ」

「そりゃ貴重だ。さて、そろそろ俺も着替えていいかな？ シャワー浴びたいし」

「夕ご飯は？」

「気分をさっぱりさせてからにする。ほれ都、いい加減に離れなさい」

彼が立ち上がろうとするので、私はしぶしぶ、抱きついていて背中から離れて、

「じゃあ、私は白衣を調達してくるから……今度は、二人で一緒にコスプレ大会ね☆」

そんな私の言葉に、薫は苦笑しながら頷いたのだった。

彼がシャワー後に夕食をとっている間、私もシャワーを借りた。

最近はずっかり、この部屋に自分の私物を持ち込んでいるので：

…今日も普段どおり、着替え一式を戸口のところに置いていたのに。服を着ようと私が手に取ったのは、普段のTシャツではなく……。

「……ねえ薫、私の着替えが男性サイズの白いワイシャツに進化したんだけど……どゆこと？」

何となく答えは分かっていた。首謀者が勝ち誇った顔でこう言う。

「コスプレといえば、コレは外せないだろ？」

いやまあ、言いたいこと分かるけどね。そりゃあよく分かるけどねっ！

まさか自分が、ワイシャツ1枚というベタな姿になるとは思っていなくて……にやりと見つめる瞳が、何となく負けた気がして悔しかった。

今度絶対、白衣を調達してきてやろう。改めて誓う私なのである。

そんな感じで。

私たちの奇妙な、それでいて愛しい関係は……これからも続いていくのである。

素晴らしき日々（後書き）

ココまでお付き合いくださって、本当にありがとうございます！
作者兼傍観者、霧原菜穂です。

結局2人は、こんな形に落ち着いたのですが……まあ、趣味に没頭
することを認められた二人ですから、居心地がいいのは間違いない
でしょうね。

最初は、ちょっと普通じゃない（こういう書き方はしたくないけど
……一番分かりやすい表現なので）2人が、自分の利益だけを追い
求める話にしようと思っていたのですが、結局、最後は普通のラブ
ストーリー……っぽいものに落ち着きましたか？ おかしいな、も
っとマニアックにするつもりだったのに。

ど、どうでしょうか？ 霧原のマニアックな思考を都にそのままト
レースしたと言っても過言ではないので、彼女が語る言葉の意味を、
どれくらいの方が頷いてくださったのか分からないし、ちょっと不
安なのですが。（笑）

この物語は、私のパソコン上のサイト「Frontier Spirit」で公開されている作品に加筆・修正をしたものになります。
サイトでは用語解説&外伝・続編等もありますので、興味がある方
はご覧ください。

いずれ、こちらにも続編を投稿していきたいな……とは、思っ
ております。

ひとまず、彼らの物語はここまででございます。

お付き合いいただきまして、本当にありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9181a/>

Two Strange InterestS

2011年6月6日17時10分発行